
非日常の旅人

泡泡

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

非日常の旅人

【Nコード】

N6285W

【作者名】

泡泡

【あらすじ】

この作品は永久凍結されています。

第一話　全ての始まり

???? サイド

???? 「ここは……どこ……?」

寝た時は自分のベッドの上だったはずなのに、起きてみると真っ白い空間の中にぼつりと横になっていた。キヨロキヨロと見渡すと何かを書いてありそうな手紙が。

???? 「えつと、あなたは日常に飽き飽きしていたみたいなので非日常へと飛ばします。……んっ?特典は5つ、思い浮かべるだけで次の瞬間には自分のものになっています。時間は無限にありますので悩んで下さい。」

はははは……。と俺はこぼれる笑みは隠せなかった。だって日常に飽き飽きしていて並行世界パラレルワールドに行ってみたかったんだから。

???? 「よぉーし。一つ目は異世界をある周期で渡れる力、二つ目はその行った世界の中で最強と言われている人物の2倍の力。三つ目は世界に対応した知識。四つ目と五つ目は保留でいいか?」

と、誰に言うでもないが呟いてみると真っ白な空間が瞬いたので了承したと取った。

意識を集中して、まだ名も決まっていな名無しの主人公が一番最初に行こうとした世界は……?

???? サイド終

第一話〜全ての始まり〜（後書き）

僅かながら作者の夢も入っています。
感想はどんと来いですが、ガラスな心は砕かなければ幸いです

第二話　異世界への第一歩

??? サイド

ピカッ……と森の中が一瞬光を放って静かになると、一人の青年が現れた。

我らが主人公、名を設楽凱^{したらがい}と名乗ることにした。

「ようやつと最初の異世界へたどり着いたか。まっ、旅行気分でも楽しもうかな。並行世界って言うぐらいだからオレの記憶に頼りきれないし……まず最初に場所の確認に図書館へGO」

きれいな図書館にたどり着いてここら一帯の地図を眺めると“海鳴市”の文字があった。そしてあたりを見渡すと車いすに乗った、ため……はやてらしき少女の姿も確認できた。

「つてことはA'sに突入はしていないから無印ってとこかな。あとは戸籍は……どうすっかな。無計画で来たことのツケが一つあったし」

ふと、頭に浮かび上がる地図、能力二つ目の知識とやらが働いたようだ。テクテクと問題なく歩きここが初めて来た場所でないかのように行き着いた場所は二階建てのマンションだった。中に入ると自分の表札があつてここが、自分ちなことは間違いない。

「野宿回避」。おっ、戸籍発見。行き当たりばつたりでもなんとか能力働くもんだわ。原作はあまり壊したくないから姿現さずに

無印とA'sを影から応援して三期から一管理局員として働くか！
！まずはリミット付けてデバイス造って、っと。おおーやること沢山あるしどれもこれも日常とかけ離れててワクワクしてきた。」

凱サイド終

“一日目終了”

第二話〜異世界への第一歩〜（後書き）

えつと原作の影ありませんね。

早く原作人物を出したいですが駄文ですみません。

第三話〜主人公の紹介〜（前書き）

デバイス情報を追加。

第三話　主人公の紹介

～主人公～

名前：設樂凱したらがい　名字の由来は珍しい名字の上位に入っていたという安易な理由。

年齢：18歳ぐらい

容姿：ガンダムWのヒロ

性格：楽観的でたま～にめんどくさがりな一面も。

能力：？異世界旅行する力

？世界に適応するための知識

？その世界の最強人物の2倍の力

魔力：EXだがDにリミッターを付けて生活。

？干涉が必要な時に干涉を教える直感

？？？？？

～デバイス～

名前：レン　名前の由来は殲滅せんめつてんし天使からとりました。

年齢：14歳の少女をイメージ

容姿：いつもは凱の手首にかかっている腕輪だが人間化すること
も可能。紫色のワンピースを着用。

性格：凱に似て楽観的なこともあるが怒りが頂点に達すると、暴
走状態に……。

魔力：A A S S 凱が頭に浮かべている技・魔法を再現できる
ぐらいリンクしている。

第三話　主人公の紹介（後書き）

今流行している転生とは違う異世界へ旅立った青年の生き様を紹介できれば僥倖です。忘れないうちにオリジナルと原作混ぜて投稿したい（^^）

第四話　魔法少女との遭遇（前書き）

原作に少し近づける？かも

第四話　魔法少女との遭遇

凱サイド

「あつ。流星群？いや物語の始まりだ。確認はしてないけどジュエルシード落ちてきたか。デバイス造れたし良かったのかな」

？『いや　ちゃちゃつと造られちゃったから肝は冷え冷えもಂಡしたがね』

「んっ、レンかぁ。デバイスには“レン”って付けたけど気に入った？」

レン『そだね。気にいったよ、マスター。一週間で造っちゃった時にはびっくりしたけど異世界旅人なんだもんね。人型にもなれるし……』

「レンにもモデルはいます。ファル○ムさんの鎌持った天使ですが」

凱サイド終

？「助けてっ……」

なのは「っ。今何か聞こえなかった？」

すずか「なにか？」

なのは「なんか声みたいな。」

アリサ「別に」

すずか「聞こえなかったかな」

？「助けてっ……」

なのは「っ……」

慌てて声のほうに駆け出すなのは。

アリサ「なのは！！」

親友が何に反応したのか理由が分からないのでなのはに、付いていくアリサ。

すずか「なのはちゃん！！」

すずかもそうだ。アリサとなのはについて駆け足で林の奥のほうに行く。

なのは「ハアハアハアハア……多分こっちのほうから、ハアハアハア……っ」

傷ついたフェレット？を抱いてよく見てみる。

アリサ「どうしたの？なのは」。急に走り出して「

すずか「あつ、見て動物？怪我してるみたい。」

なのは「うっうん、ど、どうしよう？？」

アリサ「どうしようって。とりあえず病院？」

すずか「獣医さんだよ」

なのは「ええっと、この近くに獣医さんってあったっけ？」

アリサ「ああゝっ、えっと、確かこのあたりだと」

すずか「待って、家に電話してみる」

じゅっと少女たちを眺めるフェレット、そして気絶……。

凱サイド

凱「ふむ、ここまでは原作通りか。イレギュラーなことが起こり
そうなのは初戦闘になりそうだ」

近くの高い木の上からステルスをかけて覗k……。いや原作を
堪能する凱とレン。

凱サイド終

獣医「怪我はそんなに深くないけどずいぶん衰弱してるみたいね。
きつとずっと独りぼっちだったんじゃないかな」

なのは「院長先生どうもありがとうございます」

二人「ありがとうございます」

獣医「いいえ、どういたしまして」

笑みを浮かべて三人に挨拶を返す獣医さん。

原作通りなのでカット……。

？「聞こえますか？ボクの声が聞こえますか？」

なのは「っ！！昨夜の声と昼間の声と同じ声！！」

？「聞いてください。ボクの声が聞こえるアナタ。お願いです。ボクに少しでも力を貸してください」

なのは「あの子が、しゃべっているの？」

？「お願い、ボクのところへっ……時間が……もつつ……危険が……」

？「お願い……届いて……」

いてもたってもいられなかった本当の無印主人公なのは、動物病院へと急ぐ。すると、根こそぎ倒された樹木を見、そして得体の知れない黒い物体が昼間のフェレットを襲っているのを目にする。

しっかりと自分に飛んできたフェレットを捕まえたのは。

なのは「えっ、なになに？ いったいなに？」

？「来て、くれたの？」

なのは「しゃ、しゃべった……。」

凱サイド

凱「おおっ、フェレット羨ま……んっ、最初の見せ場、か。イレギュラーが出た場合はすぐに行動だ、レン。」

レン「りょかい、マスター」

凱「作者の都合上デバイスは日本語だって、さ。」

レン「マスター、何言ってるの？」（。。。）

凱「いつ、いや、何か電波のようなものを受信したんだ……」

レン「へえ」。あれっマスター、あの子がセットアップする前に未確認物体が攻撃しちゃうよ」

凱「くそっ、これがイレギュラーかつ、レン、ソードモードで切り刻む」

凱サイド終

なのはサイド

「……そして不屈の心はっ、えっ駄目間に合わない」

？「はあああゝ二刀流四段突き」

なのはを攻撃しようとしていた触手があっという間に消し飛んでゆく。おまけにコンクリートの壁に標本のごとく光り輝く杭が動作をさせない。

「えっ、誰？」

？「そんなことより早くその続きをっ」

「この胸に、この手に魔法をレイジングハートセットアップ！
！」

フレット「成功だ」

「ふえ、ふえ、えっっ、な、なんなのこれ？」

なのはサイド終

第四話　魔法少女との遭遇（後書き）

凱がものの見事に空気、そして原作との遭遇ですが良作なので変えようがないですね。オリキャラ入れるのに四苦八苦してこの駄文（@ | @ ; ）
お便りをお待ちしています

第五話　初戦闘とその後（前書き）

早く良い文章が書きたい今日この頃。戦闘上手く書けるかな
英語書けるところは書きますが駄文ごめんなさい。

第五話　初戦闘とその後

なのはサイド

なのは「うそ、なんなの、これ？・・・っ。ふ、ふえーこれ何？」

後ずさるなのは、追い詰める異形の物体。

フェレット「来ますっ！！」

なのは「っ」と、身構える。

空高く舞い上がりなのはの頭上に降りかかる未確認物体。

杖「Protection」

自動防御？的になのはの前方に張り出すバリア。

？「ほうほう、なかなか初戦にしては大したもんだ。それにしても小学生に救援求めるか普通？」

プロテクションに弾かれた物体があたり一面の道路や電柱に突き刺さってゆく。

フェレット「僕らの魔法は発動体に組み込んだ“プログラム”と呼ばれる方式です。そしてその方式を発動させるために必要なのは術者の精神エネルギーです。そしてアレは忌まわしい力のもとに生み出された思念体。アレを停止させるにはその“杖”で封印して

元の姿に戻さないといけないんです」

なのは「よくわかんないけど、どうすれば？って、あれっ。さっきの人は？どこ行っちゃたんだろ」

？「こちらはあまり干渉できない。イレギュラーな事にしか手を出せないのだ。詳しくは後で説明する！！」

フェレット「えっと、まあとりあえずさっきみたいに攻撃や防御のような基本的魔法は心に願うだけで発動しますが、より大きな力を必要とする魔法には呪文が必要なんです」

なのは「呪文？」

フェレット「心を澄ませて・・・心の中にアナタの呪文が浮かぶはずですっ」

？「ってか、敵は待っててくれないよな。これも違うところかつ。レン、頼むっ。」

レン「おっけー、石化の槍よ、天上より降り注ぎ我に仇成すものを刺し貫かん」

なのはとフェレットの背後に迫り襲おうとしているのを動きを止め心に浮かぶ呪文が出てくる時間をかせいだ。

杖「Protection」

なのは「リリカルマジカル」

フェレット「封印すべきは忌まわしき器。ジュエルシード！」

なのは「ジュエルシード封印っ!!」

杖「Sealing Mode・Set up」

杖から発動したピンク色の紐が異形の動きを絡めてゆく。

杖「Stand by・Ready」

なのは「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル21っ!!
封印」

杖「Sealing」

今まで荒れ狂っていた雰囲気嘘のようになり元に戻ったジュエルシードがキラッと輝く。

なのは「あっ」

フレット「これが、ジュエルシードです。“レイジングハート”で触れて」

レイハ「Receipt No.???」

ジャケットが消え着ていた服に戻ったなのは。手のひらには赤い宝石が。

なのは「あっ、あれ。終わった…の?」

フレット「はい、アナタのおかげで。ありがとう…」

緊張の糸が切れたのか道路に倒れこむフェレット。

なのは「ちょ、ちよつと大丈夫、ねえ。」

？「いや、それよりも、ちよつと場所移動したほうがいいんじゃない？道路をこゝんなにしちゃってさっ……。オレも少し加担してるけどw」

なのは「っ、も、もしかして私ここにいると大変あれなのは……。と、とりあえずごめんなさい〜」

なのはサイド終

凱サイド

ハアハアハアハア……。近くの公園まで避難して来た二人と一匹？

フェレット「す、すみません」

なのは「あつ、起こしちゃった？ごめんね、乱暴で。怪我痛くない？」

フェレット「怪我は平気です。もうほとんど治っているから」

なのは「ホントだあ。怪我の跡がほとんど消えてる、すごい。」

フェレット「助けてくれたおかげで残った魔力を治療に回せました」

なのは「よくわかんないけど、そうなんだ……。ねっ、自己紹介していい？」

フェレット「あっ、うん」

なのは「私、高町なのは。小学校三年生。家族とか仲良しな友達
は“なのは”って呼ぶよ。」

ユーノ「僕はユーノ・スクライア、スクライアは部族名だから
ユーノ”が名前です」

なのは「ユーノ君かぁ。カワイイ名前だね。」

凱「いや、男の子にかわいいって面白い子だな」 （空気のオ
リ主）

なのは「助けてくれてありがとう。名前教えてくれる？」

凱「ああ、オレは設楽凱、名字でも名前でもどっちでもいいよ」

なのは「じゃあ、凱君って呼ぶね。」

凱「それでいいよ。で、そのフェレ……。いやユーノはなん
で落ち込んでるんだ？」

ユーノ「……。すみません。あなたを。」

なのは「“なのは”だよっ！」

ユーノ「なのはさんを巻き込んでしまいました。」

なのは「あ、その……。えっと、多分私平気！あっ、そう
だ。ユーノ君怪我しているんだしここじゃ、落ち着かないよね。と
りあえず私の家に行きましょっ。後のことはそれから、ねっ！！凱
君はどうする？」

凱「まあ夜だし女の子一人で返せないよ。キミんちまで送ってく。
怒られることは確実、だけどね。少しのフォローはするつもり」

なのは「??」

凱サイド終

なのはサイド

？「おかえり」

なのは「っ。お、おにいちゃん。」

兄「こんな時間にどこにお出かけだ？」

なのは「あの、その、えっと」

？「あら、かわいい……」

なのは「お、おねえちゃん」

姉「あら？なんか元気ないね。」

兄「こんな時間に外出とはいただけない・・・」

姉「まあまあ、いいじゃない。こうして無事に帰って来たんだし。それになのは良い子だからもうこんなことしないよね？」

なのは「うん、おにいちゃん。内緒で出かけて心配かけてごめんなさい。」

姉「はいっ、これで解決。っと、あなたは誰？見かけない顔だけれど」

凱「すみません、動物病院でそちらの子を見つけまして、どうしたのかと聞けばぐったりしているフェレットを抱えてオロオロしていたものですから、家に連れ帰って保護したらどうかと言った手前、送りました“設楽凱”と言います」

兄「そうか、それはすまないことをしたね。ありがとう」

姉「なのはを送ってくれてありがとう」

凱「いえいえ、楽しかったのでそれでおっけーですよ。近くに住んでいますので何かあれば言ってください。これ、住所です。」

兄「これは、ご丁寧に・・・んっ、ここに人住んでいたっけ？」

凱「数日前に引っ越してきたばかりで街の散策中に会ったんです

よ。ではでは」

なのは「あつ、あの～。えっと、今日のことは」

凱「ああ、大丈夫ですよ、どこかで会えるはずですから、ちゃんと説明しますよ。」

なのは「はいっ。あ、ありがとう。凱君。」

なのはサイド終

第五話　初戦闘とその後（後書き）

原作にオリジナル入れるの難しか。動画面手に悪戦苦闘。お気に入り登録してくださった皆様に感謝の一言です。

第六話、魔法少女と魔法青年（前書き）

戦闘なし。日常パートです

第六話　魔法少女と魔法青年

なのはサイド

姉「でも、かわいい動物ね。母さんなんかこの子見たらかわいすぎて悶絶しちゃうんじゃない？」

兄「その可能性は否定できんなあ……。」

～翌朝～

なのはの携帯が目覚まし時計のかわりをして鳴り響く♪

なのは「ふあゝあ。おはよ、ユーノ君」

ユーノ「あつ、そのおはよう」

なのは「えっと、とりあえず昨夜はお疲れ様。」

ユーノ「それは、こちらこそ」

なのはサイド終

～回想～

昨夜、お父さんとお母さんにユーノ君を見せたら。

母「わあゝ。かわいいゝ。ホントかわいいよね」「ブンブンと振り回されるユーノ。」

なのは「お、お母さん。ほどほどに……」

父「ふむ、なかなか賢そうな“イタチ”じゃないか？」

姉「フェレットだよ、お父さん」

父「何か芸とかできるのかな？ほれっ、お手？」差し出された手にピトッと付けるユーノ。

父・母「おおっ」

母「ホント、賢いわね」

なのは「と、もう大騒ぎで。その後もユーノ君のご飯についてとか、そのほか色々とドタバタしていて昨夜はほとんどお話しできなくて……」

～回想終了～

なのはサイド

なのは「名前で呼ぶの慣れてくれた？」

ユーノ「うん。なのは」

出来たお話は普通に名前で呼んで普通にお話ししてねって事くら

い。

なのは「じゃあ、私学校に行かなきゃならないから帰ってきたらお話を聞かせて?」

ユーノ「あつ、大丈夫。離れていても話は出来るよ!」

なのは「??」

ユーノ（なのははもう、魔法使いなんだよ）

なのは「あつ、これ。わたしを読んだ時の……」

ユーノ（そつ、レイジングハートを身につけたまま心で僕に話しかけてみて）

なのは（こう?）

ユーノ（そつ、簡単でしょ。あいている時間に色々と話すよ。僕のこととか、魔法のこととか、ジユエルシードのこととか）

なのは「うん」

～学校～

なのは「おつはよ」

アリサ「なのは! 昨夜の話聞いた?」

なのは「ふえ、昨夜って?」

すずか「昨日行った病院で車の事故か何かあったらしくて壁が壊

れちゃったの……」

アリサ「あのフェレットが無事かどうか心配で……」
なのは「あつ、え〜とね。その件はそのー」

アリサ「そつか、無事でなのはんちにいるんだ〜」

すずか「でも、すごい偶然だったね、たまたま逃げ出してたあの子と道でバッタリ会うなんて」

アリサ・すずか「ねえ〜」

なのは「アハハ、嘘はついてない、嘘はついてない。ちょこつと真実をばかしただけw」

なのは「あーそうだ、あの子なんだか飼いフェレットじゃないみたいで当分の間うちで預かることになったよ。」

すずか「そうなんだ」

アリサ「名前付けてあげなきゃ、もう決めてる？」

なのは「うん！ “ユーノ君” って名前」

ユーノ（ジュエルシールドは僕らの世界の古代遺産なんだ。本来は手にした者の願いを叶える魔法の石なんだけど、力の発現が不安定で昨夜みたいに単体で暴走して、使用者を求めて周囲に危害を加える場合もあるし。たまたま見つけた人や動物が、間違って使用してしまつてそれを取り込んで暴走してしまう場合もある）

なのは（そんな危ない物がなんでうちのご近所に？）

ユーノ（……僕の、せいなんだ。僕は故郷で遺跡発掘の仕事をしているんだ。そしてある日、古い遺跡の中であれを発見して調査団に依頼して保管してもらっていたんだけど、運んでいた時空船が事故かなんらかの人為的な災害に遭つてしまつて。21個のジュエルシールドがこの世界に散らばつてしまつた。今まで見つけられた

のはたったの二つ。)

なのは(あと19個か)

? (でも、それってユーノのせいじゃないっしょ。事故か人為的な災害だったらさ。ぼくのせいだゝって言うからユーノがとんでもないことをしでかしたのかと思っちゃったよ)

ユーノ(うん、事故なんだ・・・。)

なのは(じゃあ、ユーノ君のせいじゃないよ。でも、今の声って?)

ユーノ・なのは(凱君???)

凱(おうっ、昨日ぶりだね。あまり干渉しないって言ってたんだけどこっちの事情も少し話さなきゃって思って。どこで念話入れようか迷ってw)

ユーノ(確かにそんなこと言ってましたね。凱さんはどこかに所属しているんですか?)

凱(んゝっと、所属はしていないんだ。どう言ったらいいのかな。
パラレルワールド並行世界から来たって言ったら信じる?)

なのは(いまいち分らないよ)

凱(君たちの時代のこと詳しく乗っている百科辞典みたいなのがこちらには存在するんだけど何%かの確率で史実とずれが生じるときがあるんだがその時に行動するのが自分たちってこと)

ユーノ（だからあまり干渉しないと言っていたのか・・・）

凱（極力、手は貸さないけどイレギュラーなことがおきたら行動するだけ覚えてて。）

ユーノ（そうですか・・・）

なのは（あれっ、ユーノ君どうしたの？）

ユーノ（見つけたのは僕だからちゃんと元の場所に戻さないと駄目だから・・・）

なのは（なんとなく、なんとなくだけど。ユーノ君の気持ち分かるかもしれない。真面目なんだね、ユーノ君は。）

ユーノ（えっと、昨夜は巻き込んで助けてもらって本当に申し訳ないんだけど、この後は僕の魔力が戻るまでの間ほんの少し休ませてもらうだけでいいんだ。1週間、いや5日もあれば力が戻るからそれまで・・・）

なのは（戻ったら、どうするの？）

ユーノ（また独りでジュエルシードを探しに出るよ！！）

なのは（それは、ダメ）

ユーノ（だ、だめって・・・）

なのは（わたし、学校と塾の間は無理だけどそれ以外の時間だっ

たら手伝えるから)

ユーノ(だけど、昨日みたいに危ないことだってあるんだよ)

なのは(だって、もう知り合っちゃったし。話も聞いちゃったもの。ほっとけないよ!それに、昨夜見ないなことが近所で度々あったりしたら皆さんのご迷惑になっちゃうし。ねっ!ユーノ君、一人ぼっちで助けてくれる人いないんでしょ?一人ぼっちはさびしいもん。わたしにもお手伝いさせて)

なのは(“困っている人がいて助けてあげられる力が自分にあるならその時は迷っちゃいけないって”これうちのお父さんの教え)

なのは(ユーノ君は困ってて、わたしはユーノ君を助けてあげられるんだよね?魔法の力で)

ユーノ(・・・うん)

なのは(わたし、ちゃんと魔法使いになれるかどうか自信ないんだけど)

ユーノ(なのははもう魔法使いだよ。多分、僕よりもずっと才能がある)

なのは(そっ、そうなの?自分ではよくわからないんだけど、とりあえず色々教えて?わたし、頑張るから!!)

ユーノ(うん・・・ありがとう) 目に涙を浮かばせながら感謝を述べるユーノ。

なのは（もう少しでうちに着くよ。そしたら、一緒におやつを食べようよ）

ユーノ（うん、そうだね）

なのは（今日のおやつは何かな）

なのは・ユーノ・凱「っ……」

なのはサイド終

第六話〈魔法少女と魔法青年〉（後書き）

ご指摘・誤字脱字がありましたら気軽にどうぞ。
次回はオリ主空気にしないように一生懸命打ちます

第七話〜少女の才能〜（前書き）

一応戦闘シーンです。オリジナル要素はすこしだけ。

第七話でようやくと一日が終わりです。少し省きながら書くと思います。

第七話　少女の才能

なのはサイド

なのは（ユーノ君、今のって？）一瞬感じた違和感に身震いしながらユーノと念話で話す。

ユーノ（新しいジュエルシードが発動している、すぐ近く）窓から外を眺めながら自分の体にまだ魔力が戻っていないことを、体を震わせて嘆く。

なのは（ど、どうすれば？）

ユーノ（一緒に向かおう。手伝って）

なのは（うんっ）

なのはサイド終

～神社の境内～

なのは達が異変を感じて間もない頃、ジュエルシードがいびつな器となって異形へと変貌した結果、赤い目が複数あり獰猛な様子で牙をむき出しにした物へと変化を遂げた。元は動物だがおびえて足がすくんでしまった女性へと襲いかかろうとしていた。なのははまだ姿が見えない。異形は女性へと襲いかかった。

間に合わないかと思った時、つむじ風のような風が巻き起こり女性と異形の間を分けた。

凱サイド

「ふいー、またか。命の危険にさらされるようなことが立て続けに起きるんだ？間に合ってよかったから良いものの・・・っ、痛」
一応、場所は分かっていたから最速で飛んできた凱は、怯えていた女性を間一髪で助ける事ができた。

だが、凱の左腕は手首からひじまで異形の牙のあとがついてしまった。

レン「マスター治しますか？」デバイスなのに心配する様子は人間と一緒だった。

「大丈夫だよ、レン。なのは達が来るから完全にじゃなくて少しお願い」あまり深く考えていないオリ主みたいだ。腕を軽く回してみると、骨に響くような痛みがあったがレンの“治療”という言葉が聞こえてくると痛みが無くなってきたように思えた。

凱サイド終

なのはサイド

ユーノ「なのはっ、レイジングハートを」神社までの長い階段を息を弾ませながら駆けあがる。

「うん」手には輝く赤い宝石、レイジングハートが握られていて出番を今か今かと待っているように思えた。

ユーノ「原住動物を取り込んでいるから実態があるぶん、手ごわくなっている・・・」なのはに今回封印しなきゃならない相手の

様子を簡単に説明。

「だ、大丈夫だよ。多分」境内に着いて、自分を落ち着かせようとしているがその発した声は震えている。

ユーノ「なのはっ、レイジングハートの起動を」何もしないなのはに焦ったのかユーノは、慌てて話しかけた。

「ふえっ。き、起動ってなんだっけ……」ユーノ「えっ」驚きのあまり自分の体が硬直するのが分かる。いや、そんな時間もないのかもしれない。なのはに向かって駆けだす異形。

ユーノ「我は使命を」から始まる起動パスワードを「なのはの肩に飛び乗ったユーノが言うが、駆けだした原住異形は止まらない。ユーノの視界の中に“凱”が見え、デバイスを構えているのが分かるがやはり干渉しないのだろうか。

「あんな長い覚えてないよ」ユーノ「もう一回言うから繰り返して」「分かった」

しかし、どう考えてももう間に合わない距離にまで来ていたが、いきなりレイジングハートが輝きを増し目をつぶらないといけないうらいになった。

「レイジング、ハート？」レイジングハート「スタンバイ、レディ」。セフトアップ」光に包まれるのはが次の瞬間に目にしたものはレイジングハートが杖状態になっているところだった。

ユーノ「パスワードなしでレイジングハートを起動させた」ユーノの驚きを想像してみよう。二回目起動させる初心者が途中の経過を全てとばして完成させたのだ。想像しようにもしきれないのが

事実かもしれない。

ユーノ「なのは、防護服を」レイジングハート「バリアジャケット」またまた、光り輝いて瞬間的に防護服が構成される。

突進してくる異形に対しても“プロテクション”が効いていてなのはひとつの怪我もなく倒してしまった。

ユーノ「あのダメージをノーダメージで。やっぱりだ。この子すごい才能をもってる」

「いたたた、っていうほど痛くはないかな。えっと、封印つてのをすればいいんだよね？レイジングハート、お願いね」「リリカルマジカル、ジュエルシードシリアル16封印」

元の姿を取り戻したジュエルシードはなのはが持つレイジングハートの元に吸い込まれて一件落着。

「これでいいんだよね？」落ち着きを取り戻してユーノに声をかける。

ユーノ「うん、これ以上ないくらいに」階段の一番上でなのはに声をかけたユーノもさっきまでの緊張はどこ吹く風の如く落ち着いた。

満面の笑顔を浮かべるなのはの様子は二回目の戦闘が上手くいったことをあらわしていた。

凱「お疲れ様、二人とも」凱は高くも低くもない空の上からなのは達を激励した。

「うん、ありがとう、ユーノ君もお疲れ様」それに素直に感想を返しながらちょっと空を飛びたいと思ったのはであった。

なのはサイド終

第七話　少女の才能（後書き）

　サイドって書いてあってその人が中心のときには名前を省いてみました。

感情表現あったほうがいいですか？色々要望は受け付けていますがすぐ、向上するとは限りません。

技・魔法の名前を常時受け付けております。知恵を貸してください

第八話　四つ目に願う力と新展開？（前書き）

オリジナルですので短いと思います。

猫に右手を引き裂かれキーを叩く度に痛いです・・・。

第八話　四つ目に願う力と新展開？

凱サイド

朝、起きて一段落した時に思ったことがあった。それは・・・
「イレギュラーが起きてから行動するのでは遅すぎるのではない
か？」と言うことだ。二回の戦闘は原作主人公たちに着いて行っ
た結果、死者を出さずに行動できただけで幸運^{ラッキー}なことは続かないの
ではない。という結論に達した。

「こうなったら、四つ目の能力をお願いしますか」目をつむり、
意識を最初の真つ白な空間に行けるように集中する。目を開けると
そこは最初、凱がいた場所だった。

「四つ目に願うのは干渉しなきゃならないときに直感が働くよう
にして欲しい」・・・自分でも何言ってるのかが、分からなかつ
たが要は動かなきゃいけないときにピンポイントで動ける事によ
うだ。

最初と同じように空間が瞬き、自分に今までなかった能力が芽生
えた感じがあった。気がつくときそこは自分の住んでいるマンシヨ
ンだったが、意識を集中しイレギュラーが起こる時期を調べた。

「んっ・・・？無印はそのまま原作通りか。良かったような面
白くないような。二期目の最終決戦が危ないつと。四層じゃなくて
五層でみんなの魔力が尽きる可能性が九割の確率で生じるか。なの
はとユーノには説明してあるし二期に介入しなきゃな」

それまでの間にどこか別の世界に跳べるかな？・・・えっ、いきなり別世界ですか？

凱サイド終

第八話〜四つ目に願う力と新展開?〜（後書き）

最初考えていたのは“なのは編”がすべて終了してから“別の世界”へと異世界を渡ろうと画策していましたが違う世界も良いなと思う自分があり、実行します。「それじゃあいやだ」という方がおりましたら感想言ってください。

15日と16日の境まで感想待ちます。

それまで“なのは編”と“第二の世界”での導入のどちらも考えようと思います

閑話〴〵もしも“ネギま”の世界に介入したら〴〵（前書き）

息抜きに違つ世界観を書くと同様の体操にもなるし、気分転換にもなるわ〴〵

閑話くもしも“ネギま”の世界に介入したら

凱サイド

「ここは・・・？学園都市っぽいなあ」あたりを見渡すところの世界の住人が見える。そして眼前には大きくそびえ立つ樹木が。ああ、世界樹って事は“ネギま”ですか。

「ん？いきなり人の姿が消えて魔力の高い連中が現れたか」認識障害の術がかけられ、ロープを身にまとい白髪に後頭部が長い人間？が、凱の近くに来了。

白髪の老人「ふおおおお。君がいきなり現れた不審人物かね？」いきなり現れた凱に対して不信感と警戒心を隠そうともせず一定の距離を保ちながら、話しかける老人。

「ええ、申し訳ありません。私は設楽凱したらがいと言いまして世界を飛び回る旅人です」

老人「えつ、それはどういうことだね？」やはり、旅人つて言うて警戒されるのだろうか。あたりにいるそのほかの魔法関係者を呼ぼうとしている。

「ええつと、私がいる世界ではある程度の異世界の歴史が納められている書がありまして。それを管理し良い状態へと導くのが旅人です」両手を肩より上に掲げて敵対の意思がないことを示しながらゆっくりと事情を話す。

老人「ふむ……。君が異世界から来たという証拠は何か持つ

ていないだろうか？それが無いと信じたくても信じられん」責任者っぽい老人がそう呟くと周りから敵意が伝わり一触即発に発展しうだ。

「分かりました。レン人間化して」腕輪を老人に見せながらレンを具現化する。一瞬、目をくらませ次の瞬間には凱のそばに140cmほどの女の子が現れた。鎌はさすがに持たせていないが。

老人「そうかい。色々と聞きたいことがあるがまあ不審人物ではなさそうじゃ。でも監視は付けさせてもらうよ」と警戒を解いて周りに潜んでいる関係者を去らせた。

「ありがとうございます」お辞儀をしてレンをデバイスに戻した。これからどんなイレギュラーがあるのだろうか？

ハッピーエンドでおわるはずの物語が一転して大惨事になる可能性が八割。

「それまでは普通に暮らそうかね」

凱サイド終

閑話〴〵もしも“ネギま”の世界に介入したら〴〵（後書き）

書きながらふと思った。“ネギま”って魔法のキー長くなかった？

“なのは”と同じで駄文がさらに崩壊しないだろうか？

また違う世界を明日以降書きます。

閑話ゝもしも“コードギアス”に入ったらゝ（前書き）

連続投稿中。

世界観は“コードギアス”ですが誰にどのように会ったのかは全て作者の脳内変換によるオリジナル色が多いです。

ギアス編では「」が会話。（ ）は思考とします

閑話くもしも“コードギアス”に入ったら

凱サイド

「わあゝ落ちてる、落ちてる」

ただいま、雲を突っ切って落下中です。なぜかデバイス^{レン}は返事をしてくれません。この世界では魔法というのが無いのでしょうか？

地上が見えてきました。女の人が車いすを移動させているのが見えます。一瞬“なのは”の世界に戻ってきたのかと思いましたが、違うようです。なぜかって、車いすに乗っている人が金色の髪の毛の女の子だからさ。あれって、ナナリーと篠崎咲世子^{しのぎさきよこ}って人？

「ああ。今度は“コードギアス”の世界ですかね。どう干涉しようかな。まあ今は落ちた後の言い訳をしなきゃな」

みるみるうちに地面は近づき、ちょうど噴水の中にダイブした。

「ぷっはゝ。死ぬかと思った。命あつてのこの生活」

無傷なのはおいといて、服を絞って水気を落としていると声をかけられた。

？「だ、誰ですか？足音が聞いたことのない人です」

怯えているのか小声で話しかける女の子がいた。

？「お嬢様、お下がりくださいっ」

車いすの前に立ってこちらを警戒しながら服に隠している暗器に手をやっている使用人っぽい女性。

「あゝ、心配と警戒させちゃってごめん。不慮の事故で噴水の中に落ちてきたイレヴンだよ」

学生にも見えないだろうしこう言っただろうと思っていたことだった。

？「そうだったんですか？急に知らない人の足音が増えたので驚きました。私の名前はナナリー、ナナリー・ランペルージと申します。それでこちらが……」

？「咲世子と言います。お嬢様の身の回りの世話をしております」

二人とも幾分緊張と警戒を解いて応対してくれた。

「私の名前は設楽凱つて言います。ここには初めて訪れましたが良いところですね」

両手を広げて心からそう思っていることを伝えた。目は見えなくとも感情は伝わるだろうと思つてのことだった。

ナナリー「ふふっ、そうでしょう。ここの庭は私のお気に入りなんですよ」

（あれっ、この人がどこにいるのか気配が薄くて分かりにくいです。でも、暖かいので悪い人ではないでしょう）

咲世子「あの〜凱さんとおっしやいましたね。大丈夫でしょうか？服が濡れたままでは風邪をひきますよ？こちらへどうぞ」

と、誘われるがままペントハウスの中へと案内した。

「えっと、良いのですか？見ず知らずの人を案内しても・・・」

咲世子「ええ、大丈夫です。お嬢様が笑顔であなたを見ているのと私もあなたが悪い人ではないと思っているからですよ」

今までは笑顔がこわばっていたのに二人とも花が咲いたかのように満面の笑顔を見せてくれる。

（ああ・・・ここは本当に良い場所だな。絶対ハッピーエンドにしないといけないな）

水に濡れて寒くて、気持ち悪いのになんとか笑顔を見ているだけで心が暖まったのに驚いた凱だった。

凱サイド終

閑話〴〵もしも“コードギアス”に入ったら〴〵（後書き）

多分この二人の性格はこんな感じかな〴〵って思いながらサクサク筆が進みました。

驚きです。

あとは水曜日以内にインフィニット・ストラトス編でも書こうかな。

閑話〱もしもISで“天才”と“異世界人”が遭遇したら〱（前書き）

小説読み返しているところなので性格がぶれる危険。

主人公の名前は統一します。

ぶつちやけ考えるのが難しいから・・・。

〱凱のIS〱

名前：パテルⅡマテル

外見：ガンダム〇〇のヴァーチェに装飾は薄紫色。

装着すると顔のバイザー以外は装甲によって操縦者の姿が見えない。

武装：両肩にダブルキャノン、両腕の武装を展開すると右腕にはバイザーと連動するスナイパータイプのビームライフル、左腕にはショットガンタイプの銃。

背中に近接用の鎌を背負っている（投擲用にも使用可能）

閑話〱もしもISで“天才”と“異世界人”が遭遇したら〱

???サイド

研究所つぱいところにパソコンのキーを叩く音しか聞こえない空間に鼻歌交じりで歌っているウサミミ付けた女性がいた。「みんな良い子に育ってね〱。まっ天才は何でもできるけど」

――警告、警告。上空数キロカラ落下スル未確認飛行物体アリ――

「なにになに？某国のミサイル？それとも隕石かなにか？」

――カメラ二映像ダシマス。確認中、確認中。解析ノ結果似テ非ナルモノナリ――

「えつとISじゃないね。コアが無いし、ここに落ちてくるみたいだから暇だし行ってこよう！」掃除が嫌いなのかズボラなのか機械の材料でぐちゃぐちゃな中を、手で分けながら研究所の外へと駆け出した。はたしてそこで会う“天才”と“異世界人”との出会いは何をもたらすのだろうか？

???サイド終

凱サイド

「落ちる、落ちる」別世界へ行こうとした凱は飛んだ瞬間、空気の薄い空から落下中と言うオマケつき。レンと話してみると次の世界は“Is”ということみたいだ。

レン「機体はパテル＝マテルよ。あとレンがAIとして補助的な役割を果たすことができるようになりました。このままでは落下ダメージがあるので呼んでください」

「おっけ。行くぞパテル＝マテル」発動は素早かった。外見はダブルオーに出てくるヴァーチェのように、両肩にせり出してくるのは基本装備のツインキャノン。バイザーが目を覆い、機体の詳細を教えてくれる。

そして眼下に迫ってきた島には生体反応が一つ、向こうにも気付かれたみたいだしこのまま行くか。ブーストを噴かせて着陸した。

「ウサミミ？」（あつ、しののたばね篠ノ之束だっけか）

凱サイド終

束サイド

逃走中の島に着いたのは完全装着して中が全く見えないロボットだった。バイザーからの視線は感じられるし敵対者かなっと思って

いると、光を放って人間が現れた。

「誰？」不快感露わにしたのが相手にも分かったのだろう、異世界人だなんて言い出した。私よりも頭が変なんじゃないかってそれが・・・設楽凱したらがいに対する第一印象だ。でも、意外と嫌いと感じなかった。変とは思ったケド。

束サイド終

凱サイド

「突拍子もないことだけど聞いてくれる？」相手が戸惑いそして軽く頷いてくれた。

「私は設楽凱。ここじゃない世界から来た異世界人だよ」

凱サイド終

「彼の登場はインフィニット・ストラトスの世界にどのように影響するのだろうか。それは遠くない将来に明らかになるだろう」

閑話〱もしもISで“天才”と“異世界人”が遭遇したら〱（後書き）

文才が欲しいデス。読者様はある程度の原作主人公たちの性格や行動は崩れるものと思って下さい。

“凱”のISが分からないという方はパテルⅡマテルでお調べ下さい。少しは分かるかと思えます。

ゝ第二の世界はISゝ（前書き）

親友で読者でもある方から作者の好きなようにと言われましたので
こうしました。

く第二の世界はISく

凱サイド

まあ普通は異世界人なんて言う頭ごなしに変わって言うのが多いけど、このウサミミはナノ単位までバラして良い？って物騒なこと聞いてくるんだもの。あゝあ、初対面は違う人がよかったなって内心想ったのは隠しておこう。

ISの生みの親ってのは変人なのかな？すぐに信じた。そのほうが楽だけど。今がどんな時期なのか聞いてみると織斑おりむらいちか一夏いっかっていう唯一ISに乗れる男性が現れたところみたいだ。

干渉する時期を探ってみると一夏と鳳鈴音ファン・リンインが戦闘中に現れる無人機が二人だけでは勝てないと出た。

「さゝて、どうするかね？」

干渉することに対して考えをまとめていると篠ノ之束からの提案が。

束「だったら、その時にこっちからとっておきの援軍を送るよって言うのはどう？」

と言いたい事を纏めてくれたから助かった。

凱サイド終

東サイド

バラしたかったけどパテルⅡマテルに搭載されているAIのレン？がヤダって言うから渋々止めたけど残念。友人いるのかなってふと思った。だって異世界旅しているんでしょ、一瞬見える横顔がなんだか寂しそう。わたしには織斑千冬ちーちゃんがいるからいいけど……。

あつ、良いこと思いついちゃった。東姉さんが親友になってあげればいいんだ。気に入ったからどこまでも着いて行くんだから……。

東サイド終

く第二の世界はISく（後書き）

篠ノ之束さんが仲間になる？かもしれない。能力は一つ願っていませんのでどうなるかは未定です。

第10話〜束との日常〜（前書き）

束の性格をうまく書けるでしょうか。無理ですね。
束がオリ主に……。。

第10話〜束との日常〜

凱サイド

さてと、無人機が乱入するまで少しの準備期間があったので、色々と備える時間があつた。その中には自分のISがどんなスペックなのかを把握する必要があつた。乱入を止めたはいいが、学園一つ消しました……。じゃ問題ありまくりだからだ。

主装武器：ツインバスターキャノン。肩からせり出す直径450mmのビームキャノンが2つ。

薙ぎ払い、一点突破、散弾を打ち出すことも可能。出力が50%以下なら一応ISの防御が働くまで手加減可能。70%以上で反動と殺傷能力が付く。

バイザーに直結させると超遠距離可能。

スナイパーモードでの距離は25km必中。40kmから70kmまではAIと連結して可能。

近接武器：大鎌。刃の部分はビームで出力を上げるとブーメランのように飛ばせる。通常背中に背負っている。両手首には接近された時の為にビームショットガンが一丁ずつ備わる。

防御：実弾をエネルギーを使わずに無効化可能。プロテクションを全方向に展開可能。スペック上では核ミサイルにも耐えられる。

「なにこれ？過激な武装のような気がする。まっ、この世界を滅ぼそうとか世界征服とかは考えていないしイレギュラーに対処するだけさ。終わったら帰るんだし……」

篠ノ之とは別のラボを借りてスペック確認をしていたが寂しさは募る一方だった。

凱サイド終

束サイド

「ふんふん」逃亡続きで理解してくれる人もいないから寂しかったな。でもがーくん（凱のこと）が落ちてきて嬉しかった。やっぱり異分子を無くしたらいなくなっちゃうのかな……？」

嬉しくて飛んだり跳ねたり繰り返したと思ったら壁に手を付いて突如としてやってきた新たな友人を心配して目に涙を浮かべる束だった。

「よしっ、落ち込んでいても仕方がないからがーくんエネルギー補充に行こうっと。」

浮き沈みの激しいISの生みの親である。が、貸したラボが静かなのに気が付く。

「がーくん……？どしたの。おねーさんに言ってみなさい。ほれほれ」

束が見たのはモニターに両手をついて落ち込む凱の姿だった。

東サイド終

凱サイド

日常から非日常へと変化する切符を手に入れたは良いけどどこに行っても親友や恋人が出来ないことに気づいて作業の手を止めた凱だった。レンというデバイス兼ISがいるとは言っても生身でないことは最大の壁だった。両手をつき深いため息をこぼしているときにラボに入ってきたのは……。

篠ノ之「がーくん……？どしたの。おねーさんに言ってみなさい。ほれほれ」

そう言ってきたのは篠ノ之東だった。東も逃亡生活を一人でしている身、少しは通じるものがあつたのかもしれない。

気が付くと自分の心の中を吐きだしていた。寂しいこと、知り合いはできても親友や恋人が出来ないこと、恋人の時に強調したのは無理もないかもと自分で納得していたが。

うんうん、頷きながら何かを考え東が言った言葉に啞然としながらもどこか嬉しかった。

東「じゃあさ、東おねーさんが親友兼恋人になってあげるよっ」

握りこぶしを自分の胸で叩いてどうどうと言い張った。

「はっ？い、いや。嬉しいけど俺は異世界を旅する身だから無理だよ」

束「5つ目の願いを叶ってないんじゃないの？異世界から別の世界へ誰かを連れて行けるようにするとか……。出来ないの？」

淒く淒く嬉しかった。その可能性も考えていないわけじゃない。だけど、誰かを連れてくるということはその相手はその元いた世界に戻ってこれない可能性だってある訳だ。ぎゅっと両手を握りしめて出した答えは。

「もう一度深く考えよう。一時の気の迷いってこともあるし。それからお互い確かめ合っても遅くはない」

これ以上話す気はないと凱は束に背を向けて退室を促す。

束「でもわたしはがーくんとどこまでも行きたい。それは変わらないよ」

後ろから聞こえてきて束は去り扉が閉まる。

「俺だってそれを選びたいよ」

という独り言は束には聞こえなかったみたいだ。

凱サイド終

第10話〜束との日常〜（後書き）

えつと流されるままに書いた結果がこれです！

もし解決した後に一人で別世界に行く場合物語は変わらず。

束が凱に着いて行く場合も支障がでないようにIS終わらせたいと思います。

皆さんはどちらがいいですか？一応期限は22日までです。

何もない場合は作者が選び後者を書きます

第11話　オリ主のいない“なのは”の世界（前書き）

原作とおりです。

オリ主がいなければ普通のなのはの世界なので原作知っている方は読まなくても大丈夫です。

第11話「オリ主のいない“なのは”の世界」

なのはが魔法を習得した翌日、神社での戦闘しジュエルシード3個。

次の日、プールで封印完了ジュエルシード4個目。

土曜日頃夜の学校で封印5個目。

翌日サッカー終了後ジュエルシード発動により街に大きな被害。6個目。

次の週末。月村家訪問、フェイト登場、なのはと交戦。フェイトがジュエルシード1個目。

温泉で2泊。夜、フェイトと再戦。ユーノはアルフと交戦。フェイト3個目。

数日後、なのは、アリサと喧嘩。フェイトと街中（空中戦）で3戦目、RH&バルディッシュ破壊。フェイト4個目

戦艦アースラ登場。夕方、海辺の公園でフェイトとの4戦目。

ジュエルシードはクロノが回収。なのはアースラに搭乗。

海上の決戦 この間にアースラ搭乗から10日間経過。新たになのは3個（計9個）フェイト2個（計6個）回収。

なのは一時帰宅。アリサ、負傷したアルフを拾う。

なのは、バニングス家を訪問。アルフと再会。一時休戦し、協力的な体制へ

早朝、なのはとフェイト、臨海公園で決戦。同日時の庭園にて、プレシアとの決戦。

なのは、フェイト達との別れ。ユーノは残留。1期終了。

6月4日午前零時 はやて誕生日。自宅にて闇の書が覚醒。

10月27日 騎士達、はやての病因に気づき、闇の書のページ蒐集を開始。

12月1日 A、S本編開始。なのは、RH監修の元、魔法の練習。フェイトの裁判判決の前日。

12月2日早朝ヴィータによる蒐集。夕方、すずかとはやて出会う。夜ヴィータがなのはを襲撃。交戦後時空管理局に搬送される。

フェイト達（主にハラOWN家）が海鳴に引越し、闇の書340ページ。

12月5日？フェイト転入（週明けに転入と発言から推測）

数日後、なのは完治。フェイトとともに新デバイスで二度目の戦い。

12月11日？ 三度目の戦い、フェイト、魔力を蒐集され、戦

闘不能に。

12月12日？ フェイトがアースラで治療。はやて入院。

12月22日はやて入院中。シグナム蒐集中。闇の書606ページ。
ジ。

12月24日終業式。見舞いで互いの素性がバレる。夜、決戦。
アリサとすずか、巻き込まれる。

第11話〜オリ主のいない“なのは”の世界〜（後書き）

IS編が一区切りしたらこの決戦からオリキャラ入れて書く予定です。

第12話 決意 (前書き)

束を連れて行きます

第12話　決意

凱サイド

「おはよう」次の日、なんて言っただけで会えばいいのか分からないまま朝の挨拶は普通にしようと思った。束も「おはよう、がーくん！」と普通に返事してくれたのには少し救われた。一晩考えたがかなり世界を変えなければならぬ決定をしなければならぬと思って、眠れなかったためだ。

この世界は大切、だから世界を元に戻した後、自分は消えなければならぬと思う一方、束が言ったように着いて行く宣言も嬉しかったりする。とうとう、自分の同行者が増えるわけだ。少しは期待もする・・・が、現世界の主要人物が消えた世界はどうなるのだろうかと思ってしまうと、独りで行動したほうが世界の為だ。と冷静でいたい自分がいたことに驚きを隠せなかった。

ふと、考えていると近くまで束が来ていた事に気付かなかったらしい。「ん？なに、束？」と少し頭を下げて気付かなかったことを謝っていると「私は本気よ。昨日言ったことに変わりはないよ。私は貴方に着いて行きたい」と真剣に目と目を合わせて言われた。

分かった。遊びじゃなくて真剣に考えているんだというのが伝わって来た時目からうるこが落ちたかのようにスッキリした。

凱サイド終

東サイド

ふう。眠れなかった……。がーくんのせいだ。私は本気。がーくんが何を考えているのか少しは分かるつもりだった。多分正常になった世界に篠ノ之束という存在がいなかったらどうなるのかと言う事を気にしているのだろう。でも私は神出鬼没！少しいなくなっただけで大丈夫だよ。

だからがーくん。私は貴方と着いて行きたい。いつまでも飽きるまでもいいから一緒に付き添いたいとまで思うようになったんだよ。こんな気持ちは初めて。千冬は分かってくれる親友だけどがーくんは違う……。よね。なんだろう関係は？って聞かれたらどう答えよう。

でもこの気持ちはどう考えても変わらない。がーくんに近づいて行ったのに気が付かなかったみたい。もう真剣に考えてくれるのはうれしいけど……。ごめんごめんって謝ってくれたからいいけどね。「どうしたの？」って聞いてくれるから深呼吸して。

「私は本気よ。昨日言ったことに変わりないよ。私は貴方に着いて行きたい」と、がーくんの大きく開かれた目を見て言った。

多分、数秒だったと思うけど目と目を合わせたあと今まで真剣さが目に見えていたのにそれが無くなったことに気が付いた。諦め？ううん、違う。真剣な表情が分かってくれたとはつきり分かった。

ここまで言わせておいてぐだぐだ優柔不断な事言ったら本気で怒っていたところだけがーくんも同行してくれることを願っていたみたい。本当に良かった。

束サイド終

凱サイド

本当についてくるんだ。これが、素で思ったこと。異世界旅人を普通に引き受けたけれど同行者の事を考えていなかったんだもの。時間が経つうちに寂しくなるのは普通の事。

純粹に願う。異世界からの同行者が欲しいです、と。これが5つ目の願いです。同行者の数は一人か二人。そう心から願った時意識が真っ白な空間に飛ぶのではなく頭の中に何かが入ってきたような感覚に襲われる。意識を失い気が付くと束が膝枕をしてくれた。

大丈夫。束と俺の願いは叶ったよ。と笑顔で言つと心配そうに顔を覗き込んでいた束の表情が一変、満面の笑顔に変わった。

凱サイド終

束サイド

がーくんが私じゃない何かに意識を集中させたのがなんとなくわかった。むうー違う女性の事？って思ってたけどと妬いたけど違うみたい。次の瞬間ふらふらと体が揺れて床に向かって倒れたからだ。

「危ないっ」タッチの差でがーくんの体を支えることに成功した。心配させて、頭打ったりしたらどうしようって起きるまで心配だった。でも、目を覚まして「大丈夫、束と俺の願いは叶ったよ」って言ってくれた瞬間に今まで心配だったのに嬉しさが込み上げてきた。

あーこれで、一緒にいられるんだ。とね。

東
サ
イ
ド
終

第12話 決意 (後書き)

感想を下さった方ありがとうございました。

しののたば

篠ノ之束は同行者となって違う世界に行くときに着いて行く協力者となります

第13話　暇はよくない

凱サイド

結ばれた？のは嬉しかったけど暇になっちゃった。束と一緒にいるのは好きだよ。だけど、それとは別に暇って言う言葉が繰り返して思考を埋めるようになってきた。

「束。何か良いアイディアない？」

膝枕してもらっている状態で上を見上げ顔と顔を向き合わせて聞いてみる。

束「ん」。私はがーくんと一緒に入れればそれで満足なんだけどね。一緒に嫌？」

可愛い事言ってくれるじゃない。嬉しさを隠すようにデコピンを額に打ってから。

「楽しいよ、だけど干渉するまで時間があるしIS学園も見てみたいっしょ！」

「……ちょっと力説してみた。鈍感な一夏を見てみたいって言うのもあったしね。」

束「じゃあさ、生徒として行ってみる？」

束の返事にはあんぐりと開けた口が塞がらなかった。

凱サイド終

東サイド

今まで灰色だった世界が色つきになって薔薇色へと転じたのはやつぱりがーくんのおかげだ。いつものように食事を取った後がーくんの頭を膝に上げて他愛もない会話をしている時だった。難しそうな表情を浮かべているのに気が付いた。

凱「暇〜」

なんて言うんだもの。私といるのに飽きちゃったの？って何だか悲しくなってきた。

「私はがーくんと一緒に入れればそれでいいんだよ。一緒に嫌？」

多分だけれど涙が浮かんでいたのかもしれない。

ペシっと言う音とともにデコピンされたって気が付いた。軽くだから意識を向かせるためにやったんだと思う。

凱「楽しいよ。だけど学園見てみたい」

力説されちゃった。……ふふっ、良いこと思いついちゃった。がーくんはどんな反応を見せてくれるんだろう。

「じゃあさ、生徒として行ってみる？」

言ったらどうなったと思う？

凱「へッ……」

……固まっていた。そりゃあそうかもしれないけどちーちゃんたちに関わりを積極的に取らなかつたらいいんじゃないのかなって軽く思っていた。

がーくんを放っておいてもう一人の親友に電話する。ちーちゃんどんな反応が返ってくるかな。楽しみ楽しみ。

東サイド終

織斑千冬サイド

突飛もない電話が鳴り響いたのは、ちょうど授業が終わって教室から出ようと思った時だった。電話のディスプレイを見て出たくなかったのは当然のことだろう。数回コールのち出た。

「もしもし？ 東か。どうした……。はっ？ いきなり言われてもはあ分かった、こちらで何とかしよう」

電話の内容は思っていたことの斜め上を行っていた。東が今一緒にいる子、がーくんと言ったがその子が学園に行きたいから転入させてくれて事だった。

数分後、履歴書が届く。見た瞬間背筋が凍った。東と同性能のISを製造し適正値はS。そして織斑一夏に続く男性だった。だが気を引き締めておかないと。弟に仇名すものだったら容赦はしない。

千冬サイド終

????サイド

虚「お嬢様、新たに学園に来る者の詳細データを手に入れました。
ある意味規格外です」

布^{のほとけ}虚^{つは}がIS学園の生徒会長に告げた。

?「いつもありがとう。へえ、これが新しく転入する生徒ね。
あの天才と呼ばれた篠ノ之束と一緒に暮らしていたという時点で各
国が飛びつきそうな情報よね。それに専用機も規格外。楽しくなり
そうね」

扇子を扇ぎながら呟く。

虚「あとこれは全世界に送られた警告文なのですが“^{がー}くん^に
手を出したらどうなるかわからないよ”との事でした」

?「それはそれで面白くなってきたわ」

現生徒会長更^{さら}識^し楯^き無^{たてなし}が室内から青く澄み切った空を眺める。

更識サイド終

ここに干涉前に原作に携わろうとする本当はいない存在が、現れ
た。さてどうなるのかは今のところ分からない。

第13話 暇はよくない (後書き)

これ限界・・・

ISでの主人公設定（前書き）

11月19日：第二形態追加

ISでの主人公設定

名前：設樂凱したらがい

年齢：17歳男性

性格：楽観的に見える飄々とした様子は表の面。裏では問題が生じたらすぐに行動して解決しようと奔走する熱血までは行かなくても熱い心を持つ。

容姿とスペック：ヒイロのような精悍な顔。鍛え上げられたその体のスペックは不明。願った力の中に最強の二倍の力を要求したため織斑千冬や更識楯無を圧倒するのはもはや当然。

IS適性：S+

その他：異世界を旅する者として最初は楽しみを持って行動していたが、段々と悲しみを増して行った。その時二度目の世界で出会った、篠ノ之束からの猛アタックを受けて同行者を増やし嬉しさ倍増。

イレギュラーを無くすとその世界から旅立つ。が、異世界に対して一度限りというわけではなく転々と移動を繰り返す。

専用機

名前：パテルⅡマテル

スペックは変わらず。

待機状態：右手にはめている腕輪。

その他：A Iと言う名目で話しかけることが出来る。名前は「レン」。“なのは”の世界の名残で念話も可能になっている。I Sの補助担当。

第二形態

名前：アイオーンTYPE - α

外見：パテルⅡマテルの時のように重厚な外見がなくスラリとした外見。純白の人型兵器。

攻撃手段

ドリルクラッシャーパンチ

直線にいる相手に向かってドリルを飛ばす。接触した相手はかなり吹き飛ばされる

グレネイド

範囲攻撃。背中に収納されている爆弾が、発射されると追尾し、どこまでも追って行き着弾するとその機体が所持している特殊効果がキャンセルされる。

パトリオット・フィールド

自己補助。最終手段の一種で長時間全ての攻撃手段を、緩和もし

くは無効とするフィールドを展開し、防衛手段とする。これは操縦者の精神力がもつ限り有効。

グラビティー・ブラスト

直線攻撃。背中からせり上がってくる巨砲を相手に向けて撃つ。ハイパーセンサーでも確認できないぐらいのスピードを持つ。一撃必殺で、かすると四分の三ほどのエネルギーを削り、直撃で絶対防御が確実に作動する。

オーガクライ

全体攻撃。アイオーン赤色に染まった後、斬撃をアリーナ内に放出。逃れるすべは無し。操縦者気絶もしくは後遺症の恐れありの最終手段。

ISでの主人公設定（後書き）

どうしてこうなった。

第14話 同室の子は?? (前書き)

時間軸としては一夏が入学したてぐらいと考えると考えてください。
時間軸ずれているのはどうしようもありません。
転生ものではありませんが原作知識は持っています。

第14話 同室の子は??

凱サイド

今日からIS学園に行く事となった。少し離れるわけだからたくさん束養分を補充しているところだ。抱き合い離れて、見つめ合いそして抱き合うを繰り返していた。

「そろそろ、行くよ。暇って言ってた俺の願いを聞いてくれてありがとう。あまり関わらないで傍観しているよ。でも束が行ってくれたように楽しむことは忘れないし!」

グツと握りこぶしをつくって束に見せ笑顔でラボの外に出た。

パテル「マテルを纏って行くのは学園へ。言う言葉は決まってる。『楽しんでくるよ』急加速し雲の上へと出てバイザーを通してラボを見降ろすとまだ手を振っている束が見えた。手を振り返して学園へと急いだ。

凱サイド終

束サイド

今日はがーくんが学園へと行く日だ。寂しくはなるけれど一緒にいてくれると言ってくれたし嘘偽りはないと思っているから大丈夫。こちらものがーくん栄養を吸収している。行く時間となった。

凱「楽しんでくるよ」

笑顔で言ってくれたから色々と準備したことは無駄にはならなかったと思つて嬉しかった。

一瞬でパテルⅡマテルを身に纏つて上空まで飛躍した。そしてこっちを見ている。手をブンブンと大きく振つていたのが分かったのか振り返してくれた。そして見えなくなった。

行つてから気づいた。学園の女子と男子の割合に……。だ、大丈夫よね。私のこと恋人って言ってくれるかな。また逃亡生活の始まりかな。でもすぐ帰つて来てくれる。

東サイド終

凱サイド

数十分ほど飛行していると連絡が入った。封鎖したアリーナに降りるようにと。きびきびとした口調からこれがちー……。いや織斑千冬さんになるのか、と。主要人物と出会う事でどんな事が起きるのが楽しみだ。

数人の大人が見える。教職員の方々だろう。少し離れた所には扇子をもった女性も見えた。あとで調べておこう。アリーナの地面数ミリで止まつて降り立つ。パテルⅡマテルの装着を外してアリーナに立った。

「どもっ、ウサミミに学園行つたら？って言われてきた凱です。ちーちゃん！」

言つか言わないがでガツッと必殺の出席簿で殴られた。

織斑先生「ここでは織斑先生と呼べ」

「……はい、了解です」

織斑先生「お前が設楽凱で間違いないな？」

「そうです」

そこにはスーツに身を固めた織斑千冬が仁王立ちし質問して来た。
さあこれからどうなることやら。

凱サイド終

千冬サイド

篠ノ之束から連絡があつて間もなく上空から重量級のISに身を固めた青年が降りてきた。第一声が「ちーちゃん」とか言いだしたから殴つたのは悪く……ない。ちゃらんぽらんに見えるけど本心はどうだろうか。まあ弟^{いちか}にとって悪影響なら容赦しない。一応クラスは一夏と同じにすると会議で決まった。あとは部屋だが生徒会長が自分の妹と同じ部屋にしたらどうかと、監視の意味も含めてと相談して来たので了承した。

「設楽。お前の部屋が決まった。更識^{かんざし}簪^{かんざし}と言つ子と同じ部屋だ」

凱「はい？女子と同じ？あー了解です」

一瞬怪訝な顔をしたが自分がどういう立場なのかを悟つたらしく同意した。明日から楽しみだ。

千冬サイド終

凱サイド

まあ、イレギュラー前に介入したのはいいけどどうなるんだろう。無人機戦は覚えているんだけど生徒会長の妹ってあまり記憶にないな。確か姉の生徒会長にコンプレックスを持つてる内気な子っていうイメージがあるんだけど。おっ、ここだ。どこかの朴念仁みたいなことにはならないぞっと。

凱サイド終

更識簪サイド

今日いきなり男子が増えるとお姉ちゃんから聞いた。それも同室になるって。監視までは行かないけど見ててとまで言われた。だったらお姉ちゃんが見ればいいのに。あっそっか。織斑一夏のほうが大事なのかな。私の事なんてどうにも思っていないだろうし。ん？来た……のかな。嫌だけどあまり関わらなくてもいいよね。

「どうぞ……」

返事をするのとちよつとくだけた表情で入ってくる見たこともない男性が入ってきた。少し怖いかな。

凱「えー設楽凱っていいいます。どうぞよろしく」

挨拶して来たから返さないといけないよね。

「更識簪……です。よろしく」

小声で言ったのに聞いていたらしく名字か名前どっちで呼べば良い？って聞いてきたから名前ですって答えた。あとはベッドの位置とシャワーの時間などを聞いて決まったら疲れたらしくベッドに横になった。あまり緊張しない人だなとは思ったけどやっぱり男性は怖い。

私にはIS造らなきゃならないのに監視してって言われてお姉ちゃんみたいになんてできるわけじゃないのに嫌……だ。

簪サイド終

凱サイド

原作に関わりたくないのに、何かの意図を感じるのは気のせいだろうか。あとひしひしと視線を感じるしこの部屋にも監視カメラが設置されてるみたいだ。この簪って言う子に監視とかを頼んでないだろうか、ここの生徒会長さんは？

東が手を出したら……、って交渉していたみたいだから大丈夫と思いたいよ。

凱サイド終

第15話「朝の出来事」(前書き)

オリジナル要素です。

第15話　朝の出来事

凱サイド

朝、目が覚めると同室の子は起きて机に向かって何やら熱心に作業をしていた。控えめに朝の挨拶をしたが聞こえていないくらい熱中していて気付かない様子。

「おはよう、簪は早いんだね？」

横に行って部屋の扉をコンコンと叩きながら声をかけるとやっと気が付いてくれた。

簪「お、おはよう・・・気が付かなくてごめんね」

俯きながら返事を返してくれたから。

「気にしないでいいよ。熱心に作業していたみたいだし男性に慣れていないんじゃないかな」

気付かなかった事について気にしていないことを伝えるとようやく顔を向けてくれた。

何かを探るような眼は好きになれなかったから率直に言った。

「誰かから俺の事探るように言われた？」

そうしたら俯き頷いたので

「誰？」

問い詰めるんじゃないやなくて出せるだけ優しく聞いてみた。やはり生徒会長が根源だった。ため息とともにベッドに腰を下ろすと。

簪「怒らない、の？」

多分黙っていたことに対してだと思いが怯えながら言う簪は小動物を彷彿とさせていた。

「ん？どうして簪に対して怒るの？君の姉に対しては怒っているが。簪には怒ってない。正直に話してくれたから嬉しいだけだよ」

優しく頭を撫でながら言葉と行動にあらわした。

ポロポロと涙を流した時には驚いた。内気で男性にあまり懐かないイメージがあったからだ。

凱サイド終

簪サイド

早朝に起きて作業をしていると自室の扉を叩きながら挨拶してくる男子がいた。昨日から同室になった凱っていう男子だ。あまり知らされてはいないけどIS学園に入ってきたから少しでも探って生徒会に伝えるように言われていたので知らず知らずのうちに監視するような眼になっていたのかもしれない。

凱「誰かから探るように言われた？」

って聞かれた時には怒られるって思ってた身を竦ませ頷いた。姉からと聞くと疲れたようにベッドに腰を下ろして怒る表情を見せなかったから聞いた。

「怒らないの？」

そうしたら、正直に話してくれたことに感謝してくれたのには驚いた。気が付くと頭を撫でられていた。いつも出来の良い姉と比べられていたから自分の感情を表に出せずにたまっていたものが流れてきたみたい。涙が止まらなかった。オロオロする目の前の凱君が同室で本当に良かった。

簪サイド終

凱サイド

涙が止まった後二人で笑った。意味はないけれど笑った。そして、扉を叩く音が聞こえたので簪が応対した。そこにいたのは女子だった。当たり前だけれど。一緒に食事をしないかというのでついて行った。道中自己紹介するとそれは布仏本音のほとけほんねと言うこれまた生徒会のメンバーだった。一応警戒はさせてもらうよ。初対面の妹を使って監視しようとしたから何かあれば報復するぞ的な考えを持っていた。

凱サイド終

簪サイド

朝食と一緒にどう？って誘ってくれたのは本音ちゃん、だけど挨拶を聞いたとたん凱君の雰囲気きふきが鋭いものとなった。多分私を使っ

て監視していたことに腹を立てたんだと思う。嬉しいな。……ん？今の気持ちは一体……？本音ちゃんが横で含み笑いをしていたのにも気が付かなかった。凱君もいつの間にか校内放送で職員室に行ったことにも気付いていないから。

簪サイド終

ところ変わって職員室。

凱「はあ、1年1組ですか。一夏と同じにしたのには何か意図的な魂胆を感じざるを得ませんね」

大体予想はしていたがこの学園は隙がありそうでなさそうなのが不気味だった。

織斑先生「私の後に着いてきて教室の前では呼んだら入ってきたかい」

凱「了解です」

いよいよはじまる原作＋傍観者はどのような物語を織り成すのだろうか？

第15話 朝の出来事 (後書き)

ハーレムにはしません。好意を持っても友情で終わるようによします。

第16話　針のムシロってこの事かっ（前書き）

更新できなくて申し訳ないです。一ヶ月に一度は少なくとも投稿したいです。

第16話　針のムシロってこの事かっ

千冬サイド

全くアイツときたら、大きな問題ばかりを起こしておって……。一夏が世界初のES搭乗者になったばかりだというのにイレギュラーな存在も来るなんて。まあいいさ。一夏に仇名す者であれば容赦しないからな！

「おい、お前ら早く席に着けー！今日から転校生が新たに来ることになった。紹介しよう、入ってこい……。」

凱「失礼します……。」

クラスメイト「だ、男性……。？」

「ああ、そうだ。凱！自己紹介をしろ」

凱「はい……。設楽凱といいます。ここには特例で入ることができました。よろしく、あと織斑先生？ちよつと皆に見てもらいたいものがあるのですがよろしいですか……。？」

「ああ、長くならなければ許可しよう」

凱「大丈夫です。一応、心の準備だけはしておいたほうが良いかもしれません……。」

「えっ、それはどういうことだ？」

目の前にいる二人目の男子は私の言葉を遮ると、ディスプレイを起動させてクラスのみんなに見えるように映像を見せた。……見なきゃよかったと後悔したのは言うまでもない。

千冬サイド終

凱サイド

ここに来る前に面倒くさい事柄に巻き込まれないようにと、束が渡してくれた注意事項を映像化したものを持たせてくれた。何やら嫌な予感がしたが束が俺のためにやってくれたことだし、とあまり深刻なことを考えていなかったがその思考は覆されることになるとは思ってもよらなかった。

自己紹介ののち、クラスを眺めるとやはり男子は珍しいのか動物園の珍獣のように見られていた。それに女尊男卑という風潮の中、女子が偉いとトチ狂っている連中もいることだろうし気は抜けなかった。

「織斑先生。皆に見てもらいたいものがあるのですが……」

一応の許可を貰うと警戒される前にこれを見せなきゃと思った。多分、束が何かをやった感は拭えなかったが……

凱サイド終

砂嵐の後、ウサミミだけが映像に映った。その瞬間、ガンツと机に頭をぶつけた女子もいたがそのまま映像は移り変わる。

東「ハローハロー。ISの生みの親、東ですよ。聞いたとおり今日から新しく入った男子の設楽凱は私の恋人だあ！ってことで要らぬ偏見や、女尊男卑を示した女には厳しい処罰が望むんで覚悟しておくよ」に。じゃあ・・・がーくん何かあったらラボに連絡してね？」

ブツツと言う音がして映像が終了した。後に残ったのは呆然とする女教師二人と、机にぶつけたままの女生徒が一人。そして訳が分からないほか多数のクラスメイトだった。

凱サイド

これはありがたいけど、織斑先生の視線が痛いんだがな・・・。
東あ、恨むよ？

千冬「一体これはどういうことかな？説明してもらえるとありがたいんだが・・・」

ちよつとどころじゃない、氷点下まで下がったかのような教室の雰囲気の下、織斑先生の声だけが響く。

「ああ。そのままの意味ですよ。私は篠ノ之束に保護されたということですよ。そして一緒になった・・・。この社会は望んでも望まなくても女性が優位に立つことが多いが、俺に対してそういうことを行うヤツは容赦しないと、そういうことです」

IS学園に来る前に世界を一通り見てみた。するとどうでもいいような女性が醜くも男性をコキ使う風景を何度も見てきた・・・。それを束に言うところなつもりじゃなかった・・・と涙ながらに言うのでそれを変えようとする努力を惜しまないことを伝えてきた。

すると、学園にくるときに映像を渡されたわけだ。クラスを見ても動揺が広がっていくのが目に見える。織斑先生に行っておかなきゃならないことが一つだけあった。

「先生？一つだけ忠告……。罪のない生徒を使って監視するのをヤメロ！ISの機能を停止させようか？」

凱サイド終

千冬サイド

束からもたらされたものは、想像以上だった……。予想もしていないことだったからだ。設楽って生徒は何をこの学園に持ち込もうと言うのだ？さっぱり分からなかった。

「どういうことが説明してもらえるかな……。？」

自分でも声が冷酷になるのを抑えきれない。クラスメイトの数人がヒツ、と悲鳴を上げたのを視界にいれながら正面に立つ設楽に声をかけた。だけど、返ってきた返事は意外なものだった。

設楽が束に保護されたこと。女尊男卑な社会を望まないこと。その社会を望まないことなどをあげたのだ。そして気づかれていたのか、生徒を使つての監視を辞めるように言ってきた。

だが、私はやめるわけにはいかない。こいつは危ない！何をやるかわからないからだ。絶対にその本性を暴いてやる……。

千冬サイド終

このあとの話を続けよう。教室でのいざこざはそれで終了した。織斑先生の顔は強ばったままだったが、設楽も布仏本音の横に座り授業も何の師匠もなく終わった。少し設楽に対する生徒の様子が警戒心をもった状態のままだったが・・・。

傍観者のままでいたのに、そうならないのがイレギュラーというものだ。何が起こるかは誰にもわからない。

続く・・・。

第17話 織斑一夏 (前書き)

一夏ってこんな性格だっけ……。小説を読み読みなんとか書いている次第です。オリ主は壊れつつありますがこのままIS編は突っ走ります。

第17話 織斑一夏

織斑一夏サイド

最初は女子の中に男子が一人だけって思っていたから、いたたまれない雰囲気だった。だけどそこにもう一人の男子が転校生としてやってきた。これで少しは変わる……と思っていたのは間違いだったのだろうか。

千冬姉も何かにつけて設楽とか言う男子を警戒していたし、篠ノ之束からの伝言を聞いた後なんて歯噛みしていたし……いったいどうなるんだろうか。それに授業内容がひとつも分からないなんてこれからどうしよう……。まあ休み時間になったらもう一人の男子に声でもかけてみようかな。

一夏サイド終

凱サイド

やばいなあ、傍観者としてあまり表舞台に立ちたくないのに束のやりすぎた行動の結果織斑先生にも警戒されるし、廊下から睨みつけている女子がウザいこと……。

“ねえ、マスターちょっといいかな？”

“レンか、どうしたの？”

“あのね、今まで調整中だったパテ^{ワンオフ・アビリティー}マテの単一仕様能力が使用

可能になったよ。褒めて褒めて！」

“おおーとうとう使用できるようになったんだね。レン。よくやった”

“エヘヘヘ……”

“でもこれってチートすぎる能力じゃないか？”

“ええっ、でもでもマスターの安全を第一に思ったらこれぐらいはしないと……ねっ！”

“まあいいか……。使うときはレンに合図するから。っと向こうから織斑一夏が近づいてきたか……。メンドウくさいなあ”

一夏「ちょっといいか？」

良くないんだが、ここまで無視しなくてもいいだろう……。

「ああ、聞いている。どうした？」

一夏「いやあー俺一人だと思っていただけ、もう一人男子が増えたから挨拶しようかと思ってさ」

「ふむ、そうか。ならばよろしく。あまり人付き合いが苦手だからそこんとこよろしくな」

一夏「そうなのか。あ、俺は織斑一夏。設楽凱でいいんだよね？」

「そうだ。どの呼び方でも構わない」

一夏「それじゃあ、凱って呼ぶことにするよ。俺のことは一夏でいいからさっ！」

「了解だ、一夏。横に知り合い？なのかな知らないが誰かいるぞ？」
「……ちょっといいか？」

一夏「箒……？」

凱サイド終

一夏サイド

突然話しかけられた。目の前にいたのは六年ぶりの再会になる幼馴染だった。篠ノ之箒。俺が昔通っていた剣術道場の子。髪型は今も昔も変わらずポニーテール。肩下まである黒い髪を結ったりボンが白い色なのは、やっぱり神主の娘だからだろうか……。

身長は平均的な女子のそれだが、剣道で培った体は長身を思わせる。どこかしら日本刀を思わせる印象。

箒「廊下でいいか……？」

教室では話しにくいことなのだろうか。

箒「早くしろ」

一夏「お、おうつ。あー……」

凱「俺のことはどうでもいいからさっさと話してこい！」

すたすたと廊下に行ってしまう筈。そこに集まっていた女子がざあつと道を空ける。モーゼの海渡りかよつ。話を盗み聞きしようとする女子はいるものの、教室で感じた重苦しい雰囲気は無くなっていた。

一夏サイド終

凱サイド

ふう、行ってくれたか。鬱陶しいにも限度つてものがあるよな？あれっ、俺ってここに来てからかなりギスギスした感情を表に出し続けている・・・。まっ、それでも良いか。この社会には慣れたくても慣れないものだな。早くイレギュラーを無くして戻りたいものだ・・・。

本音「凱君？朝のアレは無いんじゃないの？」

間延びした声が横から聞こえてくる。がーくと最初呼んだが、束とかぶっていたから拒否した。当然だろ。

「・・・ほつとけ。俺はお前のことも信用していないんだから・・・」

本音「どうして？」

「自分の妹を使ってスパイしようとするヤツの親友のことを誰が信用するとも思ってるわけ？」

本音「……」

「お前も俺と距離を置いたほうがいいに決まってる……。分かつたら横にいるだけにしてくれ。頼むから……」

それ以上本音は何も言わなくなった。アンチ？上等！この社会が少しでも男性に良いものとなりますように、祈ってるぜ……。

一夏のことだが、二時間目の始まりのチャイムの後に来て 関羽に出席簿で叩かれていたよ。あれって体罰だろ？容認されていること自体がおかしいか。このあとは金髪に絡まれたりするのかな、面倒くさいことになりそうだ。

でも、パテマテの単一仕様能力発動して切り抜けるか……！

第17話 織斑一夏（後書き）

パテル・マテルのワンオフ・アビリティーを決めました。どこまで空の軌跡で統一しちゃうんだあ？と作者も少し引きましたがコレです。

黒のオープメント

効力：待機形態の状態のまま全てISの動きを止める。AICとは全くの別物。起動させようとしてもIS自体が動かない。範囲については第二形態前の場合、操縦者の見える範囲となる。発動時間は操縦者の精神力が持つ限りずっと。そしてオンオフ自在に切り替えられる。誰も逃れるすべ無し。

反則気味だったり欠点があったりすると思いますが、作者は根っからの空の軌跡好きでございます。ご容赦願います。

第18話 授業中 (前書き)

一夏ファンの読者の方には申し訳ない表現があるかもしれませんが。

第18話 授業中

一夏サイド

山田先生「であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は、刑法によって罰せられ……」

すらすらと教科書を読んでいく山田先生。しかし俺は全くついていけなかった。

「……」

机の上に積まれた教科書五冊。その一番上のものをぱらりとめくるが、意味不明の単語の羅列にしか見えない。

（お、俺だけなのか？みんなわかるのか？このアクティブなんちやらか広域うんたらとか、どういう意味なんだ？まさかこれ全部覚える必要があるのか？もう一人のほうは……あー、寝てる。大丈夫だろうか……）

ちらつと隣の女子を見ると先生の話に時々うなずいてはノートを取っている。IS操縦者が国防力に直結する昨今、いわばこの学園はエリートを育てるために機関だ。そして入学試験でもものすごい倍率を勝ち上がってきた優等生でもある。

（俺に今あるのは劣等感だけだ。はあ〜どうしてあの時ISが起動しちゃったんだろ）

山田先生「織斑くん、何かわからないことがありますか？」

山田先生がわざわざ訊いてくれた。

「あ、えつと……」

開いていた教科書をもう一度目を通してみる。うん、全然わからない。

先生「分からないことがあったら訊いてくださいね。何しろ私は先生ですから！」

えっへんとも言いたそうに、胸を張る先生。もしかしたら頼れる先生なのかもしれない。

「先生！」

山田先生「はい、織斑くん！」

やる気に満ちた返事。

「ほとんど全部わかりません」

素直に自分の弱さを吐露。そうしたほうが多くの場合、受け入れてもらえるのだ。

山田先生「えー……ぜ、全部ですか……？」

山田先生の顔が困り度百パーセントで引きつった。……あれ

？頼れる先生は何処に？

先生「織斑くん以外で今の段階で分らないと言う人はいますか？」

拳手を促す山田先生。

シーン…………。

山田先生「設楽くんは大丈夫ですか？」

設楽「はい、大丈夫です」

えっ、あいつは理解しているんだ…………。ちょっと、マジで俺だけ？

千冬「…………織斑、入学前の参考書は読んだのか？」

教室の端で待機していた千冬姉が聞いてくる。俺は素直に答えるんだ！

「古い電話帳と間違えて捨てました」

スパアアン…………。

千冬「必読と書いてあっただろうが、馬鹿者！」

また俺の中の脳細胞が吹き飛んだ。

千冬「あとで再発行してやるから一週間で覚えろ」

「い、いや。一週間であの分厚さはちょっと……」

千冬「やれと言ってる」

「はい……やります」

ギロリと睨む目は鬼軍曹を超えていたかもしれない。悪魔だ。悪魔の皮をかぶった人間だ。

千冬「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういう“兵器”を深く知らずに扱えば必ず事故が生じる。そうしないためにも基礎知識と訓練が必要だ。理解できなくても覚えろ。そして守れ。規則というものはこういうものだ」

正論に聞こえる。でも俺は望んできたわけじゃない。ある日黒服の男たちが来て『君を保護する』って言われてここに来たわけだから。『保護』って言う名目の拉致に近いような……。

一夏サイド終

凱サイド

本格的な授業が始まった。いわゆる基礎理論というものを山田先生は教科書を使って教えていた。俺には興味ないから放っておいたけれど……。一夏つてば、確実に理解していないな。見えるんだったら頭からケムリでも出ていそうなぐらい悩んでいるみたいだ。

山田先生が一夏にわからないことはありませんか？と尋ねているが、これは……。

スパアアン……。あーあつ、叩かれた。しかしいくら血の繋がりがあるとはいえ体罰ってどんなもんよ？歪んでいるなあ、織斑せんせいも……。はあ……。

山田先生「設楽くんは大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です」

何で名指しで呼ばれなきゃならないんだよ。怒り度20%

一夏は俺だけって言う顔をして驚いていたが、束と一緒にいたし基礎理論とそれに基づく応用理論もばっちり覚えてきたからそこらへんと一緒にするな。

あと『理解できなくても覚える』って一体ドコの軍隊だか……。理解しないと心がわかたれるから大変だと思っただけだなあ……。

視界の端では山田先生が一夏の相手をするとかで妄想に耽っていた。キモチ悪っ！この後の金髪ロールが乱入してくるんだっけ？いまいち忘れたがアレも女尊男卑の典型的な例だよ！メンドウくさいなあ……。

凱サイド終

第18話 授業中 (後書き)

アンチ少々のタグでも付けようかな。見て下る方に感謝を表します。

第19話 厄介事・前編 (前書き)

まあ原作に+αってところでしょうか。ー夏sideだけです。

第19話 厄介事・前編

一夏サイド

？「ちよつと、よろしくて？」

「へっ？」

二時間目の休み時間、針のむしろを味わうかと思っていた俺はいきなり声をかけられて素っ頓狂な声を出していた。

話しかけてきた相手は地毛の金髪が鮮やかな女子だった。ブルーの瞳をややつり上がりさせて俺を見ていた。わずかにロールがかかった髪の毛は高貴なオーラを出していて、雰囲気は今の女子という感じだった。

今の世の中、ISがあるせいで女性＝偉いという構図になっている。そうすると男性の立場は完全に奴隷、労働力化していた。今じゃ町の中ですれ違っただけの女にパシリをやらされるなんてしょっちゅう見かける始末……。

目の前にいる女子も腰に手を当ててこちらを睨んでいる時点で今どきの女性ということができる。ちなみにこの学園では無条件で多国籍の生徒を受け入れなければならないという義務のせいで、外国人の女子なんて珍しくもない。クラスの女子の半分がかるうじて日本人というだけだ。

？「訊いています？お返事は？」

「あ、ああ。訊いているけれど・・・用件は？」

？「まあ！なんですの、そのお返事。私に話しかけられたただけでも光栄なのでそれからそれ相応の態度というものがあるのではないかしら？」

正直この手合いは苦手だ。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし」

凱「俺も知らない。アンタ誰？」

俺よりもつとキツく言い放ったのは二番目の男の凱だった。いつの間にか俺の近くに来て話に加わっていた。女子だけの空間が嫌だったから少し、ありがたかったかな・・・。

？「私を知らない？このセシリア・オルコットを？イギリスの代表候補生にして入試主席のこの私を？」

名前はセシリアっていうのか、ふーん。悪いが聞いた反応はそれだけだった。

「質問いいか？」

セシリア「ふん、下々のものの要求に応えるのも帰属の務めですね。よろしくてよ」

「代表候補生って、何？」

がたたっ……。聞き耳を立てていたクラス的女子がずつこけた。

セシリア「あ、あ、あ……」

凱「『あ』ばかり言っていないでちゃんと言葉喋れや！」

「凱に聞くからいいや。で、代表候補生ってなんのこと？」

凱「ん？簡単に言うとISに関する国家代表の手前ってことさ。まあ少しは人よりISに乗れるっただけだよ」

「おおっ、エリートってことなのか」

セシリア「そう！エリートなのですわ！」

俺に向けた人差し指が鼻に当たりそうぐらい近かった。

セシリア「本来ならわたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡、幸運なのよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「ソレハラツキダ……」

棒読みになっても仕方のないことだと思う。

セシリア「……バカにしていますの？」

あんたが幸運だって言ったんじゃないかつ！

セシリア「大体ISについて何も知らないくせによくこの学園に入学できましたね。少くらしい知性さを感じさせるかと思っ
ていましたけれど、期待はずれですね」

俺は目の前にいるセシリアって子よりも、黙っ
てはいるが苛立ちを隠そうと
していない凱のほう
がスゲー気になる
んだけども・・・
。厄介なこと
にならないといい
なあ。

セシリア「ちょっと聞いていますの？ま
あわたくしは入試で唯一教官を倒したエリート
中のエリートなんです
から・・・」

唯一って言葉を強調して言っ
てた。・・・って、ん？

「入試ってアレか？ISを動かして戦
うってやつ？」

セシリア「それ以外に入試などあり
ませんわ」

「あれ？俺も倒したぞ、教官」

セシリア「は・・・・？」

倒したっていうかいきなり突っ込ん
できたから、かわしたら勝手にぶつ
かって動けなくなっただけだが、そ
れは黙っておこう。

俺が言ったことが相当ショックだっ
たのか、目を驚きに見開いている。

セシリア「わ、わたくしだけと聞
きましたが・・・」

「女子の中ではってオチじゃない
のか？」

セシリア「っ、つまり。わたくしだけではないと……。そ、
そうだ。もう一人のほうはどうなんですか？」

凱「ん？俺、戦ってもいないし……。それにココに来たのは
束から入ったほうがイインじゃないって言われたからココにきただ
けだし」

セシリア「あなた！あなたも教官を倒したっていうの？」

一夏のほうに向き直ってまぐし立てるように言い放つ。

「うん。たぶん」

セシリア「多分ってどう言っているのかしら？」

「落ち着けて……。」「

セシリア「こ、これが落ち着いていられますかっ！」

キンコンカーンコン……。」「

セシリア「っ……。！またあとで来ますわ！逃げないことね。
良くって？」

俺としては良くないって言いたかったんだけど、とりあえず頷
いておこう。

「凱は篠ノ之博士の指示で来たのか？」

凱「まあ簡潔に言うとなさうかな。東と一緒にいて研究してただけけれど、学校つてのも楽しそうだし、入学させてもらったんだよ。だから入試受けてないってコト……」

凱にも色々あるのだろうか。少し寂しげな表情が気になった。

一夏サイド終

一夏には何故、凱がそのような表情をしていたのだろうかと思うする時間は訪れなかった。更に厄介なことが生じるとは、凱以外の誰が予想できただろうか……。

第19話　厄介事・前編（後書き）

単一仕様能力は次話以降で公開されるハズです。メリットは、ISを起動させなくてもアビリティー発動できる点。デメリットは使用している最中、目が金色にランランと輝くこと↑理由は分からず。

第20話 厄介事・後編

凱サイド

そういえばこの後って大きな厄介事が降ってきたような……。まあいいさ、ゴーレム戦までは当たり障りのないように学園生活を過ごすだけさ。

織斑先生「それでは、この時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

一、二時間目と違って、山田先生ではなく織斑先生が教壇に立っていた。そして教室の端には山田先生がノートを手にして授業を聞いていた。

織斑先生「ああ、その前に再来週、行われるクラス対抗戦に出る代表者を決めないといけないな」

ふと思いついたように言う。

織斑先生「クラス代表者とはそのままの意味だ。対抗戦だけでなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……。まあクラス長だなじなみにクラス対抗戦は、入学時点での各クラスの実力推移を測るものだ。今の時点で一人を除いてたいした差はないが、競争心は向上心を生む。一度決まると一年間変更はないからそのつもりで……」

ざわざわと教室が色めき立つ。一夏の様子を見るとあれは分かっているいな。ちんぷんかんぷんの表情を浮かべている。

女子A「はいっ！織斑君を推薦します」

女子B「私もそれがいいと思います」

織斑先生「では候補者は織斑一夏。他にはいないか？自薦・他薦は構わないが……」

一夏「お、俺っ？」

一夏は本気で分かっていなかったらしい。クラスメイトの女子は俺の事は推薦しないらしい。それもそうだ。『推薦するなっ！』ってオーラを全身から巻き散らかしているんだから……。よっぽどの変な子でない限り推薦されないだろう。でも一抹の不安は抱えていたが。

織斑先生「織斑。席に着け、邪魔だ。さて、他にはいないのか？いないなら無投票当選だぞ」

一夏「ちょ、ちょっと待って。俺はそんなのやらない。そ、そうだ。凱はどうよ？」

「……」

あーっ、やつちゃったよ。この子は^{一夏}。巻き込まないで欲しかったのに。この流れだと確実に厄介事に巻き込まれるわーっ……。

凱サイド終

一夏サイド

クラス対抗戦ねー。そんな面倒くさいこと誰がやるんだろうって
タ力をくくっつていたのに。

女子A「織斑君がいいと思います！」

女子B「私もそれがいいと思います」

へえー織斑って言う苗字は他にもいたんだ……。それは奇遇
だな。でも次に千冬姉から聞こえた言葉は耳を疑った。

千冬姉「では、候補者は織斑一夏か……。他にはいないか、
自薦・他薦どちらでも構わないぞ」

織斑一夏ってもう一人いるんだ……。ってそんなわけあるかつ！

「お、俺っ！」

つい立ち上がってしまった。そして視線の一斉攻撃。振り向かな
くてもわかる。これは『彼ならきつとなんとかしてくれる』ってい
う無責任かつ、勝手な視線だ。

千冬姉「織斑、邪魔だ。席に着け。いないなら無投票当選だぞ」

ふともう一人脳裏に浮かんだクラスメイトがいた。そうだ、アイ
ツも道連れにしよう！

「そ、そうだ。凱はどうよ！」

そう言った時のクラスの温度が、一気に氷点下近くまで下がった

ような気がしたのは俺だけじゃないはず。あれっ、俺何かしでかしただろうか？凱のほうを向くと目を瞑って何かを考えているような様子だった。

千冬姉だったら賛成してくれるっ！……と思っただけの方を向くとやはりこちらでも微妙な表情を浮かべていた。

一夏サイド終

千冬サイド

クラスの女子からの一声で一夏に決まりかけたときは嬉しかった。よしっ、これで一夏を鍛えることができると思っていた。もう一人の男子の推薦は無かったし、ここで藪をつついて蛇を出すようなマネをすることはないだろうと思っていた。

思っていたのだが、ここまで一夏が精神面で弱いとは思ひもしなかった。もう一人の男子をあるうことが推薦してしまったのだ。どうしよう。でも、無かったことには出来ないだろうし。どうして束はこんなヤツを学園に入れたりしたのだろう……？

千冬サイド終

凱サイド

一夏あ……、お前ってヤツは。どうしようもないヤツだな。ここまでオーラを出して推薦するなあって思ってたのに……。

まあ単一仕様能力使って無かったことにできないだろうか……。
おっ、イイ事思いついた。

凱サイド終

一夏サイド

こ、この。重たい空気を誰か変えてくれないだろうか……。

セシリア「待ってください。納得がいきませんわ!」

パンツと机を叩いて立ち上がったのはさっき俺に話しかけた自称貴族のセシリアだった。

セシリア「そのような選出は認められません! 大体男性がクラス代表だなんていい恥さらしですわ! わたくしに、このセシリア・オルコットに一年間屈辱を味わえとおっしゃるのですか?」

そうだそうだ、もっと言ってやれ……。ん?

セシリア「実力からすればこのわたくしがクラス代表になるのは必然。それを物珍しいからという理由から極東の猿にしてもらっては困ります! わたくしはこのような島国までIS技術の修練に来ているのであってサーカスする気は毛頭ございません」

あれ? 俺、人じゃなくなってる。それにイギリスも島国だったよ
うな……。

セシリア「クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ!」

ますますエンジンが暖まってきたセシリアは怒涛の剣幕で言葉を

荒らげる。代表にはなりたくないがこうまで言われると癪だ。あとさつきから静かな凱が少し、というかなんまり怖い。

セシリア「大体、文化としても後進的な国で暮らさなければならぬこと自体、わたくしにとっては耐え難い苦痛で……」

カチン＆ブチッと言う音が俺と凱から聞こえてきたようだ。

「イギリスだって大してお国自慢ないだろ。世界一まずい料理で何年覇者だよ」

凱「束の生まれた日本を穢すヤツは生きている価値ナシ……。IS停止……」

セシリア「あ、あなたね。わたくしの祖国を侮辱しますの？ 決闘ですわ！」

って、言われたことよりも凱が呟いた言葉が気になった。IS停止って何……？

教室の外が段々と騒がしくなってきた。ドンドンツと教室の扉を叩く音が聞こえてきて、千冬姉が何事かと思い、教室の外へ出る。

数分後、表情を青く染めた千冬姉が凱のもとへと行く。しかし、相変わらず目をつぶったままだったので俺が凱に声をかけてみる。

「お、おいっ！ 凱。千冬姉が横に立ってるぞ」

慌てていたので、先生とつけるのを忘れたが出席簿で脳細胞との別れは来なかった。

凱「どうかしましたか？織斑先生……」

今までの喧騒とした雰囲気から一転、静かになった教室で凱の声だけが響く。そして次に発した千冬姉の言葉は耳を疑うものだった。

千冬「IS学園にある専用機と訓練機のいずれも機能を停止し、待機状態のまま動かなくなったがこれは設楽のせいだな？」

えっ……それはどういう事？

凱「答える必要はあるのかね？ISの生みの親が住んでいた日本が侮辱され、それをそのまま許すイギリスの暴挙を見逃すわけなからうに……」

千冬「それは肯定と取って構わないか？」

凱「……あんたは腐ってる。束が貶されたことについて何も思っちゃいない」

千冬「そ、それとこれとは話が別だ」

まだ洩る千冬姉を放っておいて凱はどこかに連絡を取る。

凱「もしもし？束か。オレだ。ああ……少々問題が起きてな……うん、うん。そっちでも確認した？学園全体を封じ込めた……そう、イギリスの代表候補生ごときが日本を侮蔑したわけだね。束のほうでどうにかやつちゃってくれ。……よろしく。あ、あと織斑先生は束のことを見限った様子。……うん、終わったら一緒に行こう。じゃあ、そういうことだから」

お、驚いた。篠ノ之博士と話し合っていたよ。その間にIS停止状態は無くなったみたいだったが、このまま決闘がうやむやにならないだろうか。

千冬「設楽はあとで職員室に来なさい！あとセシリアと織斑でIS戦を行いクラス代表を決める。設楽が参戦することはない」

えっと、凱はやらなくていいわけ？という事なんだ。俺が考え込んでいたことが分かったのか千冬姉が補足してくれた。

千冬「設楽は、少しわかったように規格外だ。代表には出さないが、模擬戦ぐらいだったら少し織斑を鍛えてやってくれないだろうか……？」

少し戸惑いを見せながらも千冬姉は凱にそう尋ねる。目を開けて頷く。そのあと女子と俺との間に少しのいざこざがあったことは省略しよう。

だが、負けられない戦いになることは間違いないだろう。授業は真面目に聞いて凱からISについて聞くことで少しでも強くなればいいなあ……。

一夏サイド終

余談だが、セシリアは授業後本国から電話を受けて、真っ青になっているのを多数の女子が目撃したようだった。これにより設楽凱にヤクザと言うあだ名がついたことは暗黙のうちだった。

第21話 放課後 (前書き)

—夏sideだけです。原作+オリジナル少々

第21話 放課後

放課後

一夏サイド

「い、意味がわからん……。なんでこんなにややこしいんだ。……？」

とにかく専門用語の羅列なのだ。辞書でもなければやっていけない。だがIS関係の辞書など存在しないので、俺は今日一日なにもやっていけなかった。

ちなみに放課後になってもほとんど状況は変わっていない。女子が他学年・他クラスから押しかけ小声で話し合っていた。ちなみに俺にだけだ。凱に対してはIS停止状況を作った故、恐れられているのか職員室から教室に戻ってきたあとはすこしだけ静かになっていた。

昼休みも地獄だった。俺が学食に向かうとゾロゾロと全員がついてくるのだ。大名行列じゃないっての。初めて日本に来た珍動物だよ。昔、ウーパールーパーとかいう動物が流行ったらしいが名前からはまったく想像がつかない。

山田先生「ああ、織斑くん。まだ教室にいたんですね。よかったです」

「はい？」

呼ばれて顔を上げると、副担任の山田先生が書類を片手に立っていた。

山田先生「えつとですね、寮の部屋が決まりました！」

そう言つと部屋番号の書かれた紙と鍵をよこす山田先生。

ここＩＳ学園は全寮制なのだ。生徒は寮で生活することが義務付けられている。これには将来有望なＩＳ操縦者を保護するという目的もあるらしい。

「俺の部屋。決まつてないんじゃないかなかったですか？前に聞いた話だと、一週間は自宅から通学するという話でしたが……」

山田先生「そうなんです、事情が事情なので一時的な処置として部屋割り無理矢理変更したらいいんです。……織斑くん、そこらへんの話は政府から聞いていますか？」

最後のほうは俺にだけ聞こえるように耳打ちしてきた。何せ、前例の無い『男のＩＳ操縦者』だから、国としても保護と監視の両方をつけたいようだった。

山田先生「そういうわけで、政府特命もあつてとにかく寮に入れるのを最優先したみたいです。一ヶ月もすれば個室のほうが用意できますので、しばらく相部屋で我慢してください」

「……あの、山田先生。耳に息がかかってくすぐったいんですが……」

山田先生「あつ、いやつ、これは別にわざととかじゃなくてです

ね……」

「だったら、凱はどうなったんだ？」

山田先生の話聞いていて凱もその前例のない『男性操縦者』だと気づいた俺は、凱に話しかけてみた。すると……

凱「俺にはもう部屋が用意されていた。女子との相部屋だったが、生徒会長の差し金で監視重視のなんとも落ち着かない部屋になったがね……」

さも、うんざりしているかのようにボソッと呟いた。

凱「そいつは利用されているだけらしいが、安心は出来ねえ……
。もう少して第二形態になるから邪魔してきたら消すだけ……」

「

最後の方は聞こえなかったが何やら凱も大変らしいな。

「それで部屋はわかりましたけれど、荷物は一回家に帰らないと準備できないわけですし今日はもう帰ってもいいですか？」

山田先生「あ、いえ。荷物なら……」

千冬姉「私が用意してやった。ありがたく思え！まあ生活必需品だけだな。着替えと携帯電話の充電器があればいいだろう」

ああ、この声絶対千冬姉だよ。俺の中では無条件でダースベードーとターミネーターの曲がステレオで聞こえてくる。そしてすげえ大雑把。確かにその通りだけど人間には日々の潤いも必要だと思う

んですが、姉さん。

そのあと山田先生から食堂の利用時間を聞いたり大浴場が俺が男という理由で使えなかったりという話を聞いた。初日は疲れることばかりだ。部屋に帰ってゆつくりしたいものだ。

だけれど教室を出る際に凱が言っていた言葉が気になった。

凱「一夏。部屋に戻ってもすぐに休めるとは思っなよ?」

あれはどういう意味だったんだろう。嫌味や嫌悪感を抱かせるような言い方じゃなくって、少し悪ふざけが入ったような。まあ、いいか。明日でも聞けばいいし……。

凱が言っていた事はあまり重大なことではないと判断した一夏はそのまま、部屋に向かうのだった。だが一夏は忘れていた。ここはIS学園で自分と凱以外には男性は一人もいないと言う事。相部屋の相手は女子一択しかないということを……。

一夏サイド終

第21話 放課後 (後書き)

改めて思うことそれはIS作品って難しいってこと……。

編集に穴があったので直しました。凱が来たのは一夏が入学する一日前です。ですのですらっと思えますが第とのひと悶着はまだ始まっています。

第22話 先生イ……イ (前書き)

オリジナルです

第22話　先生イ……」

凱サイド

煩わしい日常から少し落ち着きを取り戻しつつある凱だった。やっとクラスメイトの視線から逃れ、自分の時間をもてたのだから。いや……そう考えるのはまだ早いかもしれないが。

レン　AI　との会話でもうすぐ第二形態へと移行出来ることを知った。授業中に単一仕様能力を開放したのがその一番の理由らしい。これにはひと悶着があったが……。

　　回想・職員室にて

織斑先生「来たか……。設楽、どうしてお前が呼ばれたか分かっているな？」

「ええ、一応……。で、学園側としてはどうしたわけです？」

織斑先生「つ、お前にはこの問題の結果がどういう事を招いたか知らないわけでもなかるうに」

自分の机をバンツと叩いて、威嚇でもしているつもりなのだろうか。隣にいる山田先生だけがびっくりしているというのに。

「結果……ですか？ちゃんと警告したはずですよ。映像も交えて……。それとも織斑先生は自分の国を馬鹿にされても、憤りを抱いてはいけないとでも？」

織斑先生「そ、そういうことではなく。……設楽が持っているISの能力のことを言っているのだよ。こちらとしては詳細を明らかにしてもらわないと困る」

「ハッ、困るのは自分の弟に害なす存在かどうかというだけのこと。学園のためというのは二の次だろ……？」

織斑先生「家族のことを思うのは当然と考えているがな。それはいけないことか？」

「歪んでいなければそれはそれは、綺麗なものだと思います。しかし、織斑先生のは一夏が誘拐されてから変わったものですよ。ああ、詳細は束から聞きましたから結構ですが」

痛いところをつかれたのか、先生らは絶句する。

先生A「と、とにかくだ。ISの詳細を明らかにしないとこちらにも考えがある」

「……その言い方は脅しと取って宜しいか？」

尻ポケットに忍ばせたICレコーダーを起動させる。有事に役立つからだ。

B「あ、あんたのした事は異常だ。何台のISが修理せざるを得なくなっただか考えていないのか？」

「撒いた種が発芽しただけのこと。イギリス政府に謝罪を要求する」

C「ぐっ……」

それっきり会話はなくなった。授業中のアレが無かったら……と誰の脳裏にも浮かんでいるはずだからだ。

「話は以上ですか？では失礼します。……あと、織斑先生？私はこちらに向かってくる相手じゃない限り友好的だと言うことをお忘れないよう……」

織斑先生「それは一夏に対してということか？」

職員室から退出際に、先生に投げかけ返事のかわりに片手を頭の上に挙げて振った。

……とまあ、こんなことがあったわけで精神面がザクザク削られるわけでした。俺だって学園側と対立はしたくないわけで……まあ、言い合った時点で問題児のレッテルは貼られただろうがな。

扉が開く音がしてそちらに意識を向けると同室の子、簪だった。

第22話 先生イ…… (後書き)

どうしてこうなった。主人公が駆るISの設定を追加

第23話 会話 (前書き)

見返していてISを拒否したら束が恋人っておかしくないか？って
思っちゃってきてます。これからどうなるか私にもわからなくなっ
てます。

第23話 会話

凱サイド

扉が開く音がしてそちらに意識を向けると、同室の相手簪が思いつめた表情で立っていた。

簪「ねえ……どうしてあんなこと……やったの？」

恐る恐る聞いてきた簪は表情を強^{こわ}ばらせていた。

「あんなこと……？」

何を聞きたいのかは分かっていたがそれでも聞いた。

簪「つ……。授業中に凱君がやった単^{ワンオフアビリティ}一仕様能力の開放……だよ」

普段から声は大きいとは言えない簪だったが、この時だけは凱も驚くような大声で反応していた。

「……それを言ったら簪は納得するのか？」

簪「……するよう……」

少し考えての答えだったが、簪の本心が聞けたので答えることにした。

「あれはイギリスのオルコットが撒いた種だった。今の社会が女

尊男卑なのは、知っているな？あれのせいであまり力のない者でも男性に対して辛くあたる人間が増えてきた、嘆かわしいことにな」

簪「みんながみんなって訳でもないでしょう？」

「ああ、そうだな。だが殆んどが男性より女性を上において見ている。それに俺は警告したはずだ。映像付きで……」

簪「……ああ、あれね……」

思い出したのか、うんうんと頷いていた。でもこの後言った簪の言葉には驚いた。

簪「でも……」

「でも……なんだい？」

簪「ならどうしてISの生みの親が、女尊男卑のもととなる社会を作ったのにその篠ノ之博士が恋人なの……？」

「……どうしてなんだろうね……？たぶんきっかけがあったんだろうが、今となってはどうにも怪しくなってきたかもしれない……」

凱の今までの自信に満ちた言動から一転して、不安な様子を見せる簪は何かを思いついたような表情を浮かべていた。

「ホント……どうしてなんだろうね……。束……俺はあんたのことを好きで居続けることができるんだろうか……？」

第23話 会話 (後書き)

伏線作っただけどうなるかわからないです。タグにはアンチ少々つてあるんですが、重いアンチ要素を含めるかもかもしれないので注意してください。

第24話　思惑そして決別（前書き）

こちらへんから原作無視してます。更識楯無が壊れていますので、嫌な方はお戻りください。

第24話　思惑そして決別

簪サイド

お姉さんに呼ばれた。言いたいことはわかる。多分……。

楯無「いつたい、どういうこと……？」

「……言いたいことが分からないんだけど……」

楯無「織斑一夏についてのデータは後回しでいいから、設楽凱つて言う男子についての詳細データが何一つないのよ。だから早くデータを頂戴！どんなことをしてもいいからさっ！」

机をバンバン叩いて、いきり立ったように話す。

「……」

楯無「設楽って子があんたに心を開いているのは分かっているのよ？だから体でも使って、何としてもあの機体の秘密を探るのよっ！どうせオトコなんてどれも同じでしょ。色目を使ってホイホイ誘えばペラペラ喋ってくれるでしょう。だからさっさと堕としなさいな！」

「……………」

啞然、呆然とした。どうやって部屋を出たか覚えていなかった。

そのまま部屋を出た私の気持ちは一向に晴れるどころが曇り空のまま……下手をしたら土砂降りの雨が降っているかのような気持ちだったかもしれない……。

……正直、私の気持ちなんてどうでもいいかのように思っているんだわ。ISなんて無かったら良かったのに……。凱君は私のことどう思っているんだろう。同室になってあまり話をしないけれど、こちらから話を持ちかければそれはそれで話をしてくれる……。

ああ……。多分私はあの人設楽凱に惹かれているんだろう……。でも、あの人には恋人がいるって聞いている。ISの生みの親だ……。でもさっき聞いたときには少し迷っていたなあ……。どうかしたんだろうか。私がおかの役に立てればいいんだけども……。

っ……。こ、これはあの人お姉さんが言ったからじゃなくて最初からあの人設楽凱に惹かれていた結果なのだろうか……。？少し話をして気持ちを整理してみようかな……。

でも……。私はお姉さんの言い分は理解できないっ！私は言いなりじゃなくって、自分で考えて正しいと思ったことに付き従っている。……。それが結果的にお姉さんを傷つける結果になったとしても。

簪サイド終

第24話　思惑そして決別（後書き）

個人的に簪を想い人にするほうがいいのかなあ……と思ったかもしれませんが……。あと数話で乱暴にIS編を終える予定です。納得いかない方もいると思いますが……。ISは難しいんです……。次は“なのは”のほうに戻りたいと思っています。

第25話 次朝 (前書き)

長々と書いていたが、原作では一日しか経ってないことに気づきました。纏めつつちょうどいい所でIS編を終えたいと思います。

第25話　次の朝

次の日

一夏 side

「なあ……」

箒「……」

俺は『同じ部屋のよしみ』という関係で箒と一緒に朝食をとみにしているわけだが、さっきから会話が成立していなかった。

「なあつて、いつまで怒っているんだよ？」

箒「怒ってなどいない！」

「でもその顔は不機嫌そうじゃん」

箒「生まれつきだ」

「はあ……」

ちなみに朝食のメニューは和食セット。日本人に生まれてきて良かったあ……。

「なあ箒、これ美味しいな」

箒「……」

無視された……。

俺が箒の下着についてさらった態度なのが、気に入らない……？のか。あれっ？どうして箒は怒っているんだ？

箒「だから怒ってなどいらないと言っている！」

箒はそう言うが、ろくに顔も向けず何かの偶然に目と目が合ってもすぐにそらされる。これが怒ってないといえるなら全世界が平和であることも信じられるぜ。

女生徒1「ねえねえ、彼が噂の男子だっ〜」

女生徒2「なんでも千冬お姉さまの弟らしいわよ〜」

女生徒3「姉弟揃ってIS操縦者かあ。やっぱり彼も強いのかなあ？」

この反応は昨日から変わっていない。一定の距離を保ちつつ『興味津々ですよ』というむず痒い気配の包囲網。もう一人男子がいるはずなのに、俺にだけ注目されるってどういうことよ！

少し離れたところにいつからいたのか、設楽凱が座って食事をしてた。同室の子らしき人物と一緒に食事していたが誰も近づこうとしなかった。

まあ……俺にはそれよりも懸念材料が正面にいるのだが……。

「なあ、箒……」

箒「な、名前で呼ぶなっ！」

「……篠ノ之さん」

箒「……………」

名前で呼ぶなと言われたから苗字で呼んだら、今度はむすつとしてしまった。箒の苗字嫌いは直っていなかった。篠ノ之という苗字にはちよつと訳ありなんだよな……。

女生徒「お、織斑くん、隣いいかな？」

「へっ？」

隣を見ると朝食のトレーを持った女子が三人、俺の返事を待ちわびるが如く立っていた。

「ああ、別にいいけど……」

俺がそう言うと言を掛けてきた女子は安堵の声を漏らし、後ろの女子二人はガッツポーズを決めている。そして周囲からはため息が漏れていた。……いったいどうしたって言うんだ……。

女生徒「織斑くんって朝すごく食べるんだね？」

「俺は夜少なめ取るタイプだから朝たくさん取らないとキツいんだよ。ていうか女子ってそれだけしか食べないで大丈夫なのか？」

女生徒「わ、私たちは、大丈夫かな」

なんという燃費の良さ！ISを女子だけが操縦できないのはこれが理由なのか？

篤「……織斑。私は先に行くぞ」

「あ、ああ。また後でな」

さつさと篤は食事を済ませ立って行ってしまう。そのあと篤との関係を聞かれ“幼馴染”と言った時の女子の反応はどよめいたものだった。

一夏side end

凱side

憂鬱な初日を終えて、やっと次の日を迎えることができた。学園が始まる前は楽しみで楽しみで仕方なかったのに、簪に矛盾点を言われてからは束に対する愛も薄れてきたのを感じていた。

「……………」

黙々と食事を食べる俺。いつの間にか簪も俺の対面に座って食事を共にしていた。

「おはよう……………」

簪「お、おはよう」

また会話は途絶え、そのまま黙々と食事開始。簪がこちらを向き、

俺がそれに気づいたら慌てて顔をそらす……ということを何度か繰り返していたが、埒があかないのでこっちから話を切り出す。

「簪？昨日から様子がおかしいがどうかしたのか？」

簪「えっそ、そうかな。普段と変わってないと思うけど……」

「寡黙になったし何か憂いに沈んでいるのが目に見えている。……生徒会長に何か言われたのか？」

体がびくつと震えた。やはり原因は“姉”にあるようだ。

「やっぱりか……どうせ色仕掛けで俺の詳細データを探れとかでも言っただろ？」

簪「……………」

「沈黙は肯定と見るぞ。はあくあいつもいい加減分かれよ。ったく……………」

簪「ご、ごめんね。お姉ちゃんが迷惑かけて……………」

「簪が謝らなくてもいいんだ。悪いのはこそこそ陰口をたたいている馬鹿と妹が悩んでいるのを分からない生徒会長なんだからさ」
女子
大馬鹿の子

一瞬、食堂の雰囲気凍ったように感じたのは気のせいじゃないだろう。

簪「う、うん。あのね、あとで話聞いてもらいたいことがあるんだけど聞いてくれる？」

「ああ、いいよ。授業が終わったら部屋で聞こう」

簪「ありがとう」

「さてと、食事しないと先生の雷が落ちるかもよ」

簪「フフツ、そうね」

冗談交じりに軽口をたたいて簪の気持ちを和ませる。

織斑先生「いつまで食べている。食事は迅速に取れ！遅刻したらグラウンド十周させるぞ！」

グラウンドの一周が五キロあるから……。

俺と簪は食事を終えて、お茶を飲んでいる時だったから大丈夫だった。だが、一夏のほうは少し慌てて食事を食べていた。

凱side end

第25話 次朝 (後書き)

段々と“束縛恋人”のタグが消えていくと思います。私はハーレム嫌いなので一人は恋人……その他は敵対or親友のような感じの話を作りたいと思います。

第26話 一夏の専用機 (前書き)

オリ主は少し空気気味。

第26話 一夏の専用機

一夏side

二時間目が終わった時点で、早くもグロッキー気味だった。単語は予習のおかげである程度わかるが、根本的に理解不能な場所がある。何度やっても解けない問題のような……。

「……………」

不思議なことに初めてISに触れた時のような懐かしい感じが残っているのだ。だけど、教科書を読むと本当に俺がISを動かしたのかと疑いたくなるくらい理解不能だ。

俺が教科書とにらみ合いを続けている間も、授業は進んでいく。昨日はちよつとした騒ぎになったもう一人の男子、設楽凱も静かに授業を受けている。怯えていた山田先生も今日は所々、詰まりながら生徒たちに基本知識を教えていた。

山田先生「というわけで、ISは宇宙での作業を想定して作られているので、操縦者の全身を特殊なエネルギーバリアで包んでいます。また生体機能も補助する役割があり、ISは常に操縦者の肉体を安定した状態へと保ちます。これには心拍数、脈拍、呼吸量、発汗量、脳内エンドルフィンなどがあげられ……」

女生徒「先生、それって大丈夫なんですか？体の中をいじられているようで怖いんですけど」

山田先生「そんなに難しく考える必要はありません。そうですね。」

例えばみなさんはブラジャーをしていますよね。あれはサポートこそすれそれで人体に悪影響が出るといことはないわけです」

……ふと俺と目が合った。一回きょんととして数秒置いてからボツと赤くなつた。

山田先生「え、えつと。織斑くんと設楽くんは、わからないですよ。この例え……」

ごまかし笑いは教室に微妙な雰囲気を漂わせた。昨日の筈との会話でもそうであつたように、俺は女子の下着ぐらいで騒いだりはしない。設楽は……と、あいつも目を瞑つて黙っている。

織斑先生「んっ！山田先生、授業の続きを」

山田先生「は、はいっ！」

教室の浮ついた空気を咳払い一つで一喝。山田先生は教科書を落としそうになりながら、授業の続きを進める。

山田先生「そ、それともう一つ大事なことは……」

今度はISが道具ではなくパートナーの位置づけをする話に至つた。

女生徒「先生ー、それって彼氏彼女のような感じですかー？」

山田先生「そ、それはどうでしょうか。私にはまだ経験がないもので……」

経験というのはもちろん男女交際のことであろう。赤面して俯く山田先生を尻目に、クラスの女子は男女についての雑談を始めた。

なんというか凄く 女子校 って感じがする。女の子特有の匂いってやつなんだろう。昨日からずっとそうだが、お腹いっぱいを通り越して胸焼けしそうだ。

キンコーンカーンコーン

山田先生「あ、えっと。次の時間では空中におけるISの基本制動をしますからねー！」

ここIS学園では実技と特別科目以外は基本担任が全部の授業を受けもつらしい。

女生徒1「ねえねえ、織斑くんさあ」

女生徒2「質問しつもん」

女生徒3「今日のお昼ヒマ？放課後ヒマ？夜ヒマ？」

昨日の様子見は終わりを告げたらしく、山田先生らが教室を出ると女子の大部分が俺の席にスタートダッシュ。正直誰も行かない設楽が羨ましくなった。

「いや、一度に訊かれても……」

俺を囲む集団から少し離れた場所にいるのは筈だ。ISの事を教

えてもらおうとしたが、夜に訊くしかなさそうだ。

女生徒2「千冬お姉さまって自宅ではどんな感じなの!？」

「え、案外だらしな……」

スパアアアンツツ……。

織斑先生「休み時間は終わりだ。散れ」

いつの間にか背後にいる千冬姉。このタイミングの叩きはあれだ、個人情報ばらそうとしたからだろう。

織斑先生「ところで織斑、お前のISだが準備まで時間がかかる」

「へっ？」

織斑先生「予備機がない。だから少し待て。学園で専用機を用意するそうだ」

「????」

俺が全く分からないと感じていると、にわかに教室中がざわめいた。

女生徒A「せ、専用機?一年の、この時期に……」

女生徒B「つまりそれって、政府からの支援が出ているってことで……」

まったく意味が分からないという顔をしていると、千冬姉がため息混じりで呟く。

織斑先生「教科書6ページ。音読！」

「え、えつと……」

ようするに、ISコアは篠ノ之博士しか作ることができないブックボックス。博士は作りたくないから各国家・企業などで割り当てられたコアを研究している。あとコアを取引することはアラスカ条約に抵触するから禁止されている……。

織斑先生「つまりはそういうことだ。本来ならIS専用機は、国家または企業に所属する人間にしか用意されない。が、お前の場合は状況が状況なのでデータ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解したか？」

「な、なんとなく……」

・ISは世界に467機しか存在しない

・コアは篠ノ之博士以外作れない。コアをもう作っていない

・俺が特別待遇。モルモットただし実験体

女生徒1「あー、篠ノ之さんってもしかして博士の関係者なんでしょうか？」

織斑先生「そうだ、篠ノ之はあいつの妹だ」

女生徒3「ええええっ！す、すごい！このクラス有名人の身内が二人もいる」

女生徒2「ねえねえっ、博士ってどんな人？」

篤「あの人は関係ない！」

突然の大声。見ると篤に群がっていた女子も、軒並み同じような表情をしていて何が起こったかわからない様子だった。

篤「……大声を出してすまない。だが、私はあの人じゃない。教えられることは何もない」

そう言うつと窓の外に顔を向けてしまう。盛り上がった雰囲気いきなり冷水をかけられたかのような雰囲気になり困惑や戸惑いを見せつつ自分の席に戻った。

織斑先生「さて授業を始めろ。山田先生、号令を！」

山田先生「は、はい」

一夏side end

凱side

篠ノ之束に篤と言う妹がいて仲が悪いというのは聞いていたが、個人情報ばらしていいものだろうか。答えは否である。篠ノ之束がISなんてものを作ったから家族はバラバラ……悲惨な結果になったのにそれを言うのはあれっ？っていうことになる。

……あれだけ篠ノ之束に愛情を抱いていたのに、今じゃあフルネームで呼んでいる。俺も気づいちゃったのかなあ……。あいつじゃなくてあの子に惹かれてるってことに。もう少し気持ちを整理してみよう。この感情は一時の感情ではないはず……。ならこの滾る想いはなんなんだろう……。

レン『マスター、マスター？』

ふと気づくとレンから念話が聞こえてきた。

『どうした、レン？』

レン『おめでとうございます。マスターのパテルⅡマテルが第二形態へと進みました！』

『そつか……。変わった点は？』

レン『はい、武装、移動手段、単一仕様能力が強力になりました』

『能力はどう変わった？』

レン『名前は変わっていないのですが、内容がえげつないものになりました』

『ふむ……。続けて』

レン『はい、ISを支配下に置くことが可能になりました』

『……はっ？詳しく話して』

レン『はい。詳しく述べますと、全てのISの操縦を操る能力……
…と言いましょつか』

『チート過ぎないか?』

レン『殆んど欠点らしい欠点は存在しません。篠ノ之博士の影響も受けませんし、亡国のISも例外なく支配下に置くことが出来ます。』

『ありがとうレン。知らせてくれて……。別名あるまで待機』

レン『yes my road……』

さてさて、こちらの準備は整った。いつ、この世界を出るかねえ……。

第26話　一夏の専用機（後書き）

この世界でのオリ主のISのAIレンはご主人様命！のAIです。
あと単一仕様能力はイザってときしか使用しませんので……。

第27話 一夏の初陣前 (前書き)

このあとが最初の難関……

第27話 一夏の初陣前

一夏 side

あれから大変だったと一言伝えておこう。箒から放課後毎日剣道でしごかれました。俺は三年間帰宅部だと言うと厳しい鍛錬が続いたと言おう。はぁ……。俺の周りにはどうしてこつも強情な連中しかいないんだろうか。

そして俺の初陣の時が来た……。わけだが。

「なあ、箒」

箒「なんだ、一夏」

同居一週間を過ぎてやっと名前呼び合う仲に戻ることができた。六年の溝は思ったより深かったのかもしれない。

「気のせいかもしれないが……」

箒「そうか。気のせいだろう」

一つ、問題が解決していなかった。それも大きな問題が……。

「ISのことを教えてくれる話はどうなった？」

箒「……」

「目をそらすな」

あれから六日、箒は剣道の稽古をみっちりつけてくれた。ただし剣道の稽古だけだった。

箒「まあ仕方ないじゃないか。一夏のISとやらが無かったんだから……」

「知識とか基本的な事はあっただろう？」

箒「……」

「……」

俺と箒、沈黙。

山田先生「お。織斑くん、織斑くん、織斑くん！」

コケそうなぐらい急いでやってきた山田先生。見ているこっちがハラハラする足取りは変わらず、今日は慌てすぎだったが……。

山田先生「とうとう来ました。織斑くん専用IS！」

織斑先生「準備する暇はないがどうする？」

「へっ？」

織斑先生「フォーマットとフィッティングの為の時間だ。無理だと思うが、設楽に最初デモンストレーションで模擬戦を頼むことも出来るが……」

おいおい、本人がいないのにその話進めちゃっていいのか？俺の怪訝な表情に気づいたのか千冬姉が続けて言う。

織斑先生「本人には一応伝えておいた。少しあいつも教室の中で孤立し続けるのはよくないだろう。そう思って模擬戦をやってみてはどうかと言ってみた」

「設楽は何て言ったんだ？」

織斑先生「気は進まないが模擬戦程度ならやっても良いと。あとは織斑、お前の判断次第だ」

「正式にお願いして下さい」

織斑先生「……分かった。多分すぐに終わると思うがその間に準備を終わらせておけ」

「了解っ！」

踵きびすをかえて部屋から去っていく。設楽に要請しに行ったんだろう。

第「今のうちにISのフォーマットとフィッティングをしたらどう？」

「あ、ああ……なあ、第？お前は気にならないのか。設楽の模擬戦……」

第「ん。そうだな……。気になるが今はお前だけが気になる」

「お、おお。そうか。ありがとなっ」

って言うとなんは顔を赤く染め俯いてしまった。俺は何か悪いことを言ったのだろうか。

一夏 side end

凱 side

俺は観客席で一夏の初陣を今か今かと待ちわびていた。原作の知識があるとはいえ、イレギュラーなことに先ほど織斑先生から、時間稼ぎを頼まれたからだ。……俺は承諾し、最終判断は一夏に頼むと言った。

皆が俺の存在を見るなり、席を開けてくれたのは感謝するが、初日にセシリアを脅したときに付いたであろうあだ名がチラホラ聞かれるのが気に食わん！

簪「ここ、空いてる？」

「ん？見りゃ分かんたろ。俺の周り半径2メートルは空いてるぜい」

簪「クスクス……」

「なーにがおかしいんだ？」

そう言いながら簪の柔らかい頬つぺたを軽く引っ張る。

簪「痛いっ……何するのさっ！」

「最初は借りてきた小動物みたいにオドオドしてたクセに、いつの間にか対等に話してるんだものなあ……。嬉しいことに簪も変わったってことか」

簪「そう思っているんだったら凱君のおかげかなっ」

ちよつと顔を赤らめ小声になる簪の声がいじらしくてもう一度頬を掴もうとした時だった。

織斑先生「設楽、ちよつといいか？」

「……チツ。何か用ですか？」

織斑先生「舌打ちはよくない。織斑が模擬戦を頼むと言った。設楽の準備が出来次第、セシリアとの模擬戦を始めて貰っても構わないだろうか？」

「ええ、いいですよ」

用件だけ言うとすぐに俺の席から離れて行く。横から服が引つ張られたような感覚があったので横を向くと案の定、簪がむくれていた。

「……どうした？」

簪「聞いてない……」

「言ってない。それにさっき簪が居ない時に決まった事……」

簪「凱君には必要ないかもしれないけど、頑張ってね。怪我しちゃう駄目だからねっ！」

「……ああ、行ってくるよ」

差し出された簪の、手の甲にそっと口づけし観客席をあとにする。

「俺には勝利の女神がついてんだからよっ。大人しく糧になりやがれっ！」

凱side end

まったく、自重しないであろう設楽凱によるIS世界での戦いが始まる。

第27話 一夏の初陣前 (後書き)

この話を載せたあと、束||恋人のタグ外して簪||恋人にします。そのほうが作者にとって良いかもしれないので。

次話は戦闘ですが、上手くないのは勘弁してください。

第28話 模擬戦 (前書き)

sideって付けるのと付けないのだったらどっちが読みやすい
でしょうか？今回はsideってつけないで書こうと思います。

第28話　模擬戦

アリーナまでの道のりを一人で歩く凱。厳密に言えば一人ではないけれども、ぶつぶつとつぶやいている姿を見られたらそれはそれで危ない人って言うレッテルを貼られるんじゃないだろうか。

アリーナの上空を見上げるとそこにはセシリアのISが佇んでいた。凱はISを身に纏う前にハイパーセンサーだけ具現化し、相手のIS情報を手に入れる。

凱「ふむ……名を　ブルーティアーズ　中距離系型のISかあ……。こちらとの相性は良いのやら悪いのやら……。アイオーン起動っ！」

一瞬にして完全装甲へと移行する。観客席からどよめきが聞こえ、簪の憂いに満ちた表情も手に取るように見えた。

セシリア「な、なんなんですか？それ……」

先に来て待っていたセシリアの表情も驚きに満ちていた。

凱「これが俺のIS、　アイオーン　だ。それからこちらから要望があるのだが……」

セシリア「まさかこの時になってハンデを下さいとか言うんじゃないでしょうね」

少し嘲笑気味にこちらに振ってくる。

凱「そんな訳なかるうに。地球が逆回転するぐらい有り得ないこと。それよりこちらは防御と回避しかやらないからそのつもりでいる」

セシリア「ふ、巫山戯ていますの？」

逆上するセシリア……。言うことは尤もなことであるが、今からやるのは模擬戦。

凱「あのなあ……。俺じゃなくて織斑一夏とやるんだろ？俺は時間稼ぎだって」

セシリア「そうでしたわね。では始めましょうか？セシリア・オルコットとブルーティアーズが奏でる円舞曲で……」

ホイッスルとともに手に握られていたスターライトmk？が火を噴く。

凱「おれは円舞曲^{ワルツ}は嫌いだねっ」

刹那バレルロールしながら最高速へ到達し、セシリアのライフルから穿たれる弾丸を次々と交わしていく。

セシリア「くっ、ちょこまかとお……うざったらしいですわ……」

ライフルに加え、四つの自立機動兵器を作動させる。それは回避しからないアイオンの軌道を狂わせて、逃げ場を無くしていくかのように思わせた。

セシリア「終幕ですわね……」

凱「フツ……そうは行くかってんだよっ！」

アイオーンの片手が空間を払いのけたと思ったら爆音後、セシリアが放った攻撃は全て飲み込まれていった。

セシリア「なっ……」

アリーナ内が一瞬、シーンと静まり返る。

織斑先生「今の防御は一体何なのか、説明してもらえらるうか？」

拡張された声がアリーナに響く。

凱「セシリア、これで模擬戦終わってもいいか？一夏のISもそろそろいい具合みたいだし」

セシリア「え、ええ。あなたにはどうしても勝てる見込みがなさそうですし……」

凱「よし。えーっと、難しく言っても仕方ないことだろうから簡単に言っぞ。俺のIS アイオン は空間と密接に關与している機体だ」

織斑先生「もう少し詳しく」

凱「あとは自分で分かれ。根掘り葉掘り聞こうとすんな！一夏の初陣に移らせてもらっぞぞ」

織斑先生「あつ、おい…… ったく調子に乗りやがって。束の知り合いでなかったら本気で潰していたところだった……」

後ろでなにやら、不穏なことを呟いている織斑千冬を無視し凱は一喝してあとは喋らないを貫いた。だって面倒くさいでしょう？

省かせてもらうが一夏とセシリアの戦いは、一夏が自分の武装の特性を理解していなかったゆえに負けた。

この模擬戦によって設楽凱に対する女子生徒の対応も少しは、柔らかくなったがそれでも遠巻きに怯える生徒の方が多かったのも事実だ。それと何としても凱が所持しているISの詳細情報を得ようとしてスパイが増えたのもここに記しておこう。

第28話 模擬戦 (後書き)

駄文で申し訳ないです。

第29話〜代表決定〜（前書き）

原作通り

第29話 代表決定

山田先生「一年一組の代表は織斑一夏くんに決定です。あ、一繋がりでもいいですね!」

と、山田先生が嬉々として喋っていた。クラスの女子も盛り上がっている。どうしてこうなったか分からなくて暗い顔をしているのは俺だけだ…。

一夏「はい、質問です」

山田先生「はい、織斑くん」

一夏「俺は昨日の試合に負けました。それなのにどうしてクラス代表になっているんでしょうか?」

セシリア「それはわたくしが辞退したからですわ!」

椅子から立ち上がり、腰に手を当てポーズを取る。様になっているが、妙にハイテンションで上機嫌な様子を見せている。

セシリア「まあ勝負はあなたの負けでしたが、考えてみれば当然のこと……。わたくしセシリア・オルコットが相手でしたからっ!それで、私も大人げなく起こったことを反省しまして」

えっ、今『しまして』って言った?

セシリア「一夏さん」に代表を譲ることにしましたの」

女子生徒「いやあセシリアさんってば分かってるねえ。せつかく世界で稀有^{けう}な男子がいるんだもの、代表にしない手はないよねー」

セシリア「そ、それとですね。わたくしのような優秀でエレガント、華麗にしてパーフェクトな人間がIS操縦を教えて差し上げればそれはもうみるみるうちに成長を……」

箒「あいにくだが、一夏の教官は間に合っている。私が直接頼まれているからなっ!」

セシリアと箒の間で火花が散る。どうしてなのか一夏には分かっている様子だ。

セシリア「あら、あなたはISランクCの篠ノ之さん、Aのわたくしに何かごようかしら?」

箒「ら、ランクは関係ねえ……頼まれたのは私だ。い、一夏がどうしても懇願するからだ」

近くにいる一夏は懇願なんかしてないと言う風に首を横に振る。そして……。

一夏「箒ってランクCなのか……?」

箒「だ、だからランクは関係ないと言っている!」

織斑一夏はランクBな様子。でも訓練機で出したランクゆえにあんまり意味が無さそうだが……。

織斑先生「座れ、馬鹿どもが……」

第、セシリア、一夏の順に出席簿で頭を叩く千冬さん。

織斑先生「お前たちのランクなどゴミにすぎない。まだ殻も割れていないヒヨッコが優劣を付けようとするな。このクラスにはランクS+のやつがいるがな……」

最後のほうは小声になったのかほとんどの人には聞こえなかったようで、クラスメイトの注意を引く結果にはならなかったようだった。

織斑先生「代表候補性でも一から勉強してもらうと前に話したとおりだ。くだらん揉め事は十代の特権だが、今は私の管轄時間だ。自重しろ」

千冬さんがうんうんと唸っている一夏のもとに行く。

織斑先生「……お前、今何か無礼なことを考えていなかったか？」

一夏「イエナニモ……」

織斑先生「ほう……」

スパアアアアアアアン……。

一夏「すみませんでしたっ！」

織斑先生「分かればよろしい。織斑一夏がクラス代表だ。異存はないな？」

はい、と一夏を除くクラスメイトが返事をする。

第30話 平和な授業 (前書き)

IS小説の難しいこと極まりないです。

第30話　平和な授業

織斑先生「ではこれよりISの基本的な飛行操縦を実践してもらおう。織斑、オルコットそれに、設楽試しに飛んでみせろ」

織斑一夏がクラス代表生になってからの、飛行訓練だった。

凱「はい……」

クラスメイトが瞬きをする間に凱は　アイオーン　を纏う。

織斑先生「設楽は……うむ、展開が早いな。織斑、早くしろ。熟練した操縦者は展開まで一秒もかからないぞ！」

一夏にゲキが飛ぶ。初心者なのだから少し大目にみてやっても罰はあたらないのではなからうか。一夏は意識を集中した。

ISは一度フィッティングすると操縦者の体にアクセサリーの形状で待機していた。セシリアは左耳のイヤークラス、設楽は右腕にはめている細い腕輪、俺は右腕のガントレット。一夏だけ待機状態は防具だった。

一夏は、右腕を突き出しガントレットを左手で掴んでいる。心の中で百式ひゃくしきでも呼んでいるのか。刹那、右手首から全身へISが展開される。0.7秒かった。

織斑先生「よし、飛べっ！」

言われてセシリアの行動は早かった。一気に上昇しアリーナの遙か上空まで行き空中で静止した。

織斑先生「織斑と設楽も早く上げれ」

凱「了解……」

設楽はやる気のなさを見せながら軽く足を屈伸させ、もう一度その場所に目をやるともうその姿はどこにもなかった。

女生徒「あ、あれっ？設楽君の姿はどこに行ったの？」

織斑先生「オルコットの頭上……だ。あの馬鹿、普通に飛べばいいのに……」

少し織斑先生は呆れ気味だった。それもそのはず、凱は空間を捻じ曲げ跳躍したのだから。

一夏もようやくと上空にたどり着くことができた。

一夏「この自分の前方に角錐を展開させるイメージってどんなだよ？凱は分かるか？」

凱「俺のとは違うからオルコットや箒に聞いたほうがいいんじゃないか？」

一夏「そうなのか……。セシリア分かるか？」

セシリア「イメージはイメージです。自分がやりやすい方法を模索するのがよろしいんじゃないでしょうか……」

一夏「そうは言ってもなあ…。大体空を飛ぶつてのがあやふやなんだよ。はあ…これ、どうして浮いているんだ？」

セシリア「説明してもいいですが、専門的になりますわよ」

一夏「なら説明しなくていいです」

一夏とオルコットの試合後からオルコットが柔らかくなった。俺の事も毛嫌いしているのかと思えば、少し間を置きながら話しかけてくるのだから。

セシリア「そういえば凱さん。わたくしのことはセシリアで構わないとあれほと言いましたのに、まだ呼んで下さらないのですね…」

凱「…苦手なんだ。だからその捨てられた子猫みたいな顔はしないでくれよ？少しは考えてみるからさ」

セシリア「ホントーですか？あ、あと…一夏さん。よろしければ放課後に指導してさしあげますわ。その時は二人きりで…」

第「一夏っ！いつまでそんなところにいる！早く降りてこい！」

いきなり大声で話す第の声が通信回線から聞こえてきた。地上では山田先生のインカムを奪った第が怒鳴っているのが見えた。

ちなみにハーパーセンサーは望遠鏡並みに遠くの物でも近くに見える。例えば地上二百メートル離れていようが、第のまっげまでもが見えるというものだ。

織斑先生「織斑、オルコット、設楽、急下降と完全停止をやってみろ。目標は地表から二センチだ」

セシリア「了解です。それではお二人ともお先に」

すぐにセシリアが地上へ向かう。

一夏「うまいもんだなあ。っと、凱から先に行くか？」

凱「いや、一夏から先でいいよ。ゆっくりでいいからさっ」

一夏「分かった。俺から先に行くわ。……えっと、感覚としては背中の翼状の突起からロケットファイアーが噴出しているイメージを持ってつと。あつ、これ無理っぱ……」

地上に墜落か…と俺は思^{一夏}ったが、墜落寸前で百式のコントロールが何かに奪われたような感じがしてバランスを崩したまま、地表から一センチのところで止まっていた。

一夏「えーっと…な、何が起こったんだ？」

凱 side

あ、これ墜落だっけか…。しょーがない、ちょっと手を貸してやるか。

“レン…^{ワンオフアビリティ}単一仕様能力起動”

“了解、master。百式の全てのコントロールを掌握。地表

「センチで完全停止」

“よくやった。ゆっくりと百式を降ろせ”

“yes my master…”

これが一夏の墜落回避の全容だった。

凱 side end

織斑先生「ま、まさか設楽がやったのか？」

凱「少し…」

織斑先生「フン…とっとと降りてこい！」

凱「…」

無言で設楽はアリーナの限界上空まで上昇し、すぐさま急下降を始めた。有り得ない自殺行為だと誰もが思っていたのかもしれない。

誰かの悲鳴も聞こえたかもしれない。目を瞑って大惨事を見ないようになっていた生徒もいたかもしれない。だが、気がつくとも地表から一センチの所で浮いている設楽の姿がそこにはあった。

織斑先生「…よくやったと言いたいが、少し緊張させる仕方は止める。クラスメイトが失神しそうになっている」

凱「気が付きませんでした。気を付けます」

一夏「な、なあ凱。今は凱が助けてくれたのか？」

凱「ん。ああ、墜落しそうだったからちよつと助けた」

一夏「サンキューな。けど、どうやったんだ？落ちる寸前に、百式のコントロールが効かなくなったような感じに陥ったんだ」

凱「あー、あれは アイオーン の能力で一夏の 百式 のコントロールを、停止させたんだ」

一夏「へ、へえ…なんにしても助かったよ。あんがとなつ」

一夏は墜落しなくて済んだことを心から感謝しているようだった。

ふと視線を感じてそちらのほうを向くと俺凱のことを睨んでいる織斑先生と、おろおろしながら少し睨んでいる山田先生がいた。

千冬side

織斑が落ちなくて良かった……。けど、設楽の能力は異常すぎる。ISのコントロールを強制的に奪って墜落を阻止…ってあれを悪用したら、もしくははされたら……この世界はどうにかなってしまふのではなからうか。

私の頭の中をそのことがグルグルと駆け巡っていた。最近、束から連絡があった。内容は設楽の様子を聞いてきたが、束と設楽の間に溝があるようなのを電話から感じ取った。

…一体あの二人に何があったのだろうか。……ま、でも私の一番重要なことは一夏だけなのだな。申し訳ないけれど束は後回し。

だから設楽…お前が一夏にとって悪にしかならないようだったら、その時は全力で潰させてもらおう。

千冬 side end

山田 side

えーっと、私のクラスには二人の男子がいます。IS学園に男子が二人いるのも前例がないことで珍しいのですが。一人はな、なんと織斑先生の弟ですよ。一夏くんって言うんですがちよつと頭の悪い子って言う第一印象がありました。

もう一人…ですか、印象を話さないといけませんよね。よく切れる日本刀…っていうイメージが最初ありました。篠ノ之博士の恋人って言う噂もありましたし、何か不都合があつたら学園ごとなくなっちゃうんじゃないかなあとまで思っていました。

模擬戦では回避と防御しかしませんでした。セシリアさんのISを圧倒してましたしまだ慣れないです。これから慣れることができればいいなあ。

で、でもあの単一仕様能力は明らかに異常です！これだけははっきりと言えます。あれを悪用して設楽くんが反逆でもしたら…そう思ってたちよつと睨んでしまいました。

山田 side end

第31話 一夏のセカンド幼なじみ登場

少女「ふうん、ここがそうなんだ…」

授業が終わって夜、IS学園の正面ゲート前には小柄な体で不釣り合いなボストンバッグを片手にした女子が佇んでいた。

少女「えーと、受付ってどこにあるんだっけ……？」

上着のポケットからひと切れの紙を出す。が、くしゃくしゃになったそのメモは少女が大雑把な性格をしていることを示しているのかもしれない。

少女「本校舎一階総合事務受付……って、だからそれはどこにあるのよーっ」

大声で文句を言ってもそのくしゃくしゃになった紙切れは返事なんてするはずもない。小柄な少女はその紙をもう一度あまり気にもせず、ポケットに押し込む。

少女「自分で探せばいいんでしょ、探せばさあ……」

ブツブツと歩きながら文句を言う。思考より行動。そういう少女だ。良く言えば『実戦主義』悪く言うならば『よく考えない』そう言う事だ。

少女をよく見ると日本人に似ているがよく見ると違う。どこか艶やかさを感じさせる瞳は中国人のそれだ。
ジャパニーズ
チャイニーズ

少女「あーもう、面倒くさいなあ。生徒とか、先生とか道案内してくれそうな人はいないの？ いっそ、空でも飛んで探そうか」

一瞬それも考えた少女だったが……、電話帳三冊分にも匹敵する重要規約書の存在を思い出してやめた。まだ転入の手続きが終わっていないのに、ISを起動させたら……というわけだ。

??「……こんなところでどうかしたのか？」

思考の彼方から引き戻したのは何故か男性の声だった。IS学園というのは女子が大多数を占める場所……どうしてここに？ と思いながら後ろを振り向く。

少女「何あんた？」

??「俺？ 俺はここの生徒だ。篠ノ之博士絡みでここに入った男子と言えいいのかな」

少女「えーっと……。あー思い出した。いきなり電波ジャックされて映像流した内容が内容だったから記憶の彼方にしまい込んでいた。あたしは鳳鈴音^{ファン・リンイン}よ」

凱「これはこれはご丁寧に……。設楽凱と言う名前だ。よろしくー」

鈴音「うん、よろしくね。ところで、総合事務受付ってどこにあるか分かる？」

凱「ああ、一応な。ふむ……百面相してウンウン唸ってたのには訳があったと……」

凱はニヤニヤしながら鈴音が悩んでいるのを茶化している様子。

鈴音「もうっ、そんなふうになんか言わなくてもいいでしょ!」

軽く凱にひじ打ちして恥ずかしい感情に蓋をする。

凱「面白かったからしょうがないっしょ……」

鈴音「……ねえ、もう一人の男性操縦者の事を聞いてもいい?」

凱「…というか最初から聞きたかったんだろ。そわそわしていたから何となく分かったよ。そうだなあ、一夏は鈍感でハーレムフラグを立て続けているぞ」

鈴音「な、なによっそれ!真面目に聞いているのに巫山戯ないでよ!」

「冗談だと思っているので凱に、喰ってかかる鈴音。だけど、凱が真面目な顔して鈴音を見返すのでそれが冗談なんかじゃないことが分かってきた様子だ。

鈴音「……あたしも分かってるつもり。一夏はニブチンだったことに。変わってないのね」

凱「一夏を攻略するのは結構骨が折れることだと思うよ。それでもあきらめないんでしょ?」

鈴音「あつたりまえでしょっ!あたしを誰だと思っているのよ」

凱「ふふっ、鈴音は面白いなあ。見てて飽きない…。っと、少し離れているけど向こうから来るのは噂の一夏だよ。他にもクラスメイトがいるけど……」

鈴音「へえどれどれ……あっ」

鈴音が顔をそちら側に向けると、一夏が雑談しながら歩いているのが見えた。

一夏「だからそのイメージが分からないんだよ」

懐かしい声が聞こえてきて顔をほころばせる鈴音。だけどすぐに表情が強ばる。

箒「一夏、いつになったらイメージが掴めるのだ。先週からずっと同じところで詰まっているぞ」

一夏「あのなあ。お前の説明が独特すぎるんだよ。『くいつて感じ』って……」

箒「……だからそれはくいつて感じた」

一夏「それがわからないと言って……っておい、待てって箒！」

すたすたと走り去る女子を追いかける男子^{一夏}。

誰？あの女の子。何で親しそうなの。っていつか名前で呼んでいるっ！さっきまで感じていた胸の高成は嘘のように消え、今感じているのはひどく冷たい感情と苛立ち。

凱「おーい、大丈夫か？」

鈴音「へ、平気よ。い、行きましょう。受付に案内してくれる？」

凱「それならすぐだ。ほらあそこ」

凱が指を指す方向に受付が見えた。

鈴音「ありがとう。ねえ、凱って呼んでもいい？」

凱「好きに呼ぶと良い。それじゃあまた会う日まで」

受付まで案内すると、そのまま凱は寮の方へ戻っていった。

受付「ええと、それじゃあ手続きは以上で終わりです。IS学園へようこそ、鳳鈴音さん」

受付の愛想のよい声も鈴音にはどこか遠くで聞こえている声のようだった。

鈴音「織斑一夏って、何組です？」

いかにも不機嫌な様子で唇を尖らせながら聞いてみる。

受付「ああ、噂の男子ねえ。あの子は一組よ。鳳さんは二組です。そう言えばあの子クラス代表になったらしいわよ。やっぱり織斑先生の弟さんね」

鈴音「二組の代表ってもう決まっているんですか？」

噂話が好きなのは女性の特許みたいなものと思いつつ、冷ややかな口調で聞いてみる。

受付「決まってるわよ」

鈴音「名前は？」

受付「え、ええっと。聞いてどうするの？」

態度が段々とおかしくなっているのに気づいて、戸惑いながら聞き返す。

鈴音「お願いしようかと思って。代表をあたしに譲ってっ…！」

につこりと笑いつつもその顔には血管マークが付いていた。

少し離れたところには、寮に帰ったはずの凱が様子を伺っていた。

凱「やはりこうなるのか。鈴音対一夏の試合の時には警戒していないと……。俺というイレギュラーをかかえながら物語はどう動いていくのか…見当もつかない」

第31話 一夏のセカンド幼なじみ登場 (後書き)

誤字脱字や、意味不明なところがありましたら、感想ください。

今年もよろしくお願いします。

第32話 一夏が主役のパーティー

女生徒A「というわけで織斑くん、クラス代表決定おめでとう」

パンパンとクラッカーが次々に鳴らされる。夕食後の自由時間を利用して、織斑一夏のクラス代表決定のパーティーが行なわれていた。

俺も一夏の近くでは無いにしても一応誘われたから来たが、これは辛いものがある。辺り一面女子女子女子だからだ。

主役の一夏を見ると、げんなりした様子で目と目があった。

「ご愁傷さま……と俺は肩をすくませ、我関せずを突き通すことにした。

簪「みんなと交わらない……の……？」

ふと気づくと聞きなれた声がしたので横を向くと、部屋で休んでいたはずの簪が俺の横に立っていた。

凱「ああ、騒がしいのは嫌いで……ね」

簪「そうなんだ。横に座ってもいい？」

少し椅子をずらして簪が座れるようにスペースを開ける。二人で一緒に眺めていると、一夏が筭と話しているのが見えた。少し不機嫌……なのか。

第「人気ものだな、一夏」

一夏「……本当にそう思うか？」

第「ふんっ……」

一夏は第に向かって手を伸ばして途中で止める。行き場を無くした手が空中で固まっていた。

凱「ほんつとどうして一夏は鈍いのかねえ……」

簪「クスクス……」

少しずつではあるが内気な簪も、こうして普段より沢山の人間がいる中に来るのは大いなる進歩と言えよう。

「はいはい。新聞部です。話題の新生、織斑一夏君と……あともう一人に取材をしたいんだけどな」

大きな歓声があたりを包み込む。オーツと言う声がこちらまで聞こえてきた。

「あ、私は二年の^{まゆみかおる}黛薫子。新聞部副部長をやってます。はいこれ名刺。あともう一人は……いた」

キヨロキヨロと周りを見渡して俺と目が合った新聞部副部長さんは小走りできて、真正面で立ち止まる。

黛「貴方にも取材をしたいんだけどな。これ名刺ね！」

とても元気な口調で話しかけてくる相手だが、怖いという雰囲気は感じないのだろうか。すごく疑問に思った。

凱「どうも……」

黛「元気ないなー。また今度取材申し込むねー」

そう言つと一夏のほうに駆けていった。

簪「良かった…の？」

凱「ああ、今は君簪というほうが何倍もイイ……」

簪「うっ、うん。そう言ってもらえて私も嬉しい……」

顔を赤らめて俯き気味にそう俺凱に伝える。これを凱と簪の近くで聞いていたクラスメイトの何人かが、同じように赤面したのはココだけの話だ。

凱のほうに走って行つたのにまた俺一夏に帰ってきた。はあ、取材つて受けなきゃならないんだよね。憂鬱や……。

黛「ではでは、織斑君。クラス代表になった感想は？」

カチリと言う音がしたのでそのほうに向くと、どこから出したのかボイスレコーダーがその手に握られており俺一夏の声を録音する気なのはすぐに分かった。

一夏「えーっと……」

乗り気でないが期待を裏切るわけにもいかないだろ！

一夏「なんというかがんばります」

黛「えーっ、もつといいコメントちょうだい。『俺に触れるとヤケドするぜ！』みたいな」

一夏「自分、不器用ですから」

これが俺に言える精一杯のコメントだった。そこ、笑うな！

黛「うわ、前時代的なコメント。まあいつか。こっちで適当に捏造しておくから」

よくないよ。と突っ込みを入れたかったがここはグツと堪えておこう。早く取材終わんないかな。

黛「セシリアちゃんもコメントちょうだい」

セシリア「わたくしこういうったコメントはあまり好きではないのですが……。ではまずどうしてクラス代表を辞退したかというと」

好きでないと言いつつも髪の毛のセットを普段より、気合を入れているところを見るに察するならば写真対策だろう。

黛「長そうだから写真だけちょうだい」

セシリア「さ、最後まで聞きなさい！」

黛「適当に捏造しておくから。よし織斑君に惚れたからってことにしておこう」

セシリア「なっ、な、ななな……」

急に確信に触れたのがいけなかったのか、口が上手く回らない様子。これを怒り心頭と考えた一夏はそんなはずはない、と言い切りセシリアに逆に怒られてしまった。

あれえ？俺^{一夏}って何かいけないことでも言ったかな。鈍感でニブチンにも程がある…。

凱「やれやれ…あいつといるとホントに飽きないなあ」

簪「ホントね……。ところでいつまでそこにい、いるつもり……？」

凱「いやか？嫌ならすぐに止めるが……？」

簪「ううん、嫌じゃないよ。反対に好きって言つか……」

最後のほうはまたもや、小声でもごもごと話す。今、凱がどうなっているかと言うと長椅子に座っている簪に、膝枕状態で顔と顔を見合わせている状態なのだ。

凱「最後のほう聞こえなかった、よ？」

両手で簪の顔を挟み込み、真剣な眼差しで見つめ合う。どうもここが食堂だということを忘れてこいつらは二人だけの空間を作っていて様子…。

少し離れたところから恨み積もった視線を感じるのだが、それも気づかないふりをして見つめ合う。

簪「あの…ここ、食堂…」

最初に耐え切れなくなったのは、やはり簪のほうだった。生徒の好奇心に溢れた眼差しと、呪いと恨みの視線を受けながら甘い雰囲気を保たせ続けるのは無理だった。

凱「あーっ、そっか。続きは自室で聞こうかな。君の偽りのない本心を…ね」

むくつと起き上がり周囲の視線を一人占めしているにもかかわらず、どこ吹く風の如し。そのまま簪の手を引いて食堂を出ていった。

その光景に俺は^{一夏}哑然としていた。初日、ヤクザとか言われていた凱と仲良くしている人がいるなんて…。

混乱は少しの間続いていたが、そのあと記念写真を撮ることになった。セシリアと二人で…という話だったが気がつくとも全員が入っていた。瞬間移動…？

まあなんにしても、女子のパワーって計り知れないものがあるな。このあとモクラス代表パーティーは夜の十時過ぎまで続いた。

そして途中から目を覆いたくなるぐらい、筭の不機嫌さが度を増していった。何故か分からないが寝る直前にやっと不機嫌なオーラを出すのをやめたが。

そうそう、あいつらはどうなったのかねえ。明日でも聞いてみようかな。

・凱と簪の部屋・

凱「さてと、さっきは俺が暴走気味だったから食堂で結果を急ぎすぎちゃったケド。ここなら大丈夫だよ。言いたいこと伝えて……」

2メートルぐらい離れて向かい合わせになって座り込む。そしてこちらから急がせるのではなく、簪が話し始めるまですっと待った。数分、数十分待ったかもしれない。そしてようやく……。

簪「……はじめは分かっていたように貴方の監視だった。だけど姉に反抗しているうちに自分の気持ちに気づいた。そしてそれから急激に惹かれ続けた」

凱「……」

話してくれるのはありがたかったけど、簪がこんなふうに考えているとは思ってもみなかった。

簪「あいつに愛想を尽かしたのはあの時……。そう貴方が職員室に呼ばれていた時のこと、私は生徒会室で対面していた。そこでの女は……女、は」

手を膝の上で握りこぶしを作って話そうとしていたが、そこからはどうしても話そうとしなかった。

凱「簪？大丈夫か？」

簪「ありがと、…あの女は色目を使って騙せと言ったの。この時に姉の為に動くのをやめようと思ったの」

話している間、ずっと簪の顔は膝のほうをむいていたが顔をこちらに向き直すとその顔は涙でぐしゃぐしゃに濡れていた。

凱「簪……」

簪は指の先で涙を拭くと、一つ大きな深呼吸をして言い放つ。

簪「わたし更識 簪はあなた設楽 凱がとっても好きです。大好きですっ」

拭いきれない涙で濡れた簪の顔は、とても綺麗だったのを覚えている。それから俺は嬉しくなって簪に抱きついた。あとは……。うん、まあ健全だよ。

抱きしめて唇と唇が触れるだけの口づけをしただけ。緊張しすぎたのかふらふと倒れちゃうんだもの、びっくりしたよ。でも意識を失う数秒前に…。

凱「俺も最初っから君のことが大好きだったよ」

って俺は言うことが出来、それに対して簪が微笑み返したのを確認することができた。

凱「言っちゃった…、言っちゃった。エヘヘヘ……」

…どうやら凱は良い意味で壊れたようだ。でもその笑いは状況を

知らない誰かが見たら不審がられるよ？多分……。

第33話 一夏のハーレム形成中 (前書き)

一夏に対してオリ主は嫌悪を感じているわけではないのであしからず。

第33話　一夏のハーレム形成中

女生徒A「織斑くん、おはよー。ねえ転校生の噂聞いた？」

一夏の祝賀パーティーの次の日の朝、教室の自分の席に着くなりクラスメイトに話しかけられた。入学からの数週間で俺にも話しかけてくれる女子が増えた。

一夏「転校生？今の時期に？珍しいな」

入学が終わって間もない四月だ。入学ではなく転入だ。そしてこのIS学園に転入するにはかなりの厳しい条件があったはずだ。試験と国の推薦がないと来れなかった気がする。…ってことは。

女生徒A「なんでも中国の代表候補生なんだってさー」

一夏「へーそうなんだ」

セシリア「あら、わたくしの存在を危ぶんでの転入なのかしらー？」

代表候補生はもうすでに確認できているだけで一人いるのだ。イギリス代表候補生、セシリア・オルコット。今回も、腰に手を当てて優雅なポーズを取っているのが様になっさまている。

そこで俺は考えた。イギリス人つてもしかして全員このポーズが似合うようにできているのだろうか……。

第「このクラスに転入してくるわけではないのだろう？別に騒ぐ

ほどもあるまい」

さっきまで自分の席 窓際の最前列 にいたはずの篤がいつの間にか一夏のそばに来ていた。さすがに女子っただけあって、噂話には敏感なのだろう。

一夏「どんなやつなんだろう？代表候補生って言うぐらいだから強いのかなあ……？」

篤「むっ、気になるのか？」

一夏「少しだけ」

篤「ふんっ……」

聞かれたことについて答えただけなのに、どうして篤の機嫌は悪くなった？むすっと言う擬音がとても似合うぐらいの表情をしている。最近、とても機嫌が良くなったり悪くなったりと情緒不安定なのだろうか？

一夏「気になる……」

凱「何が気になるんだ？」

一夏「おっと、凱か。驚くじゃないか。……今度話すよ」

凱「……？そうか。それはそうとあの二人のテンションがとてつもないぐらい上向きだぞ？」

凱がそう言っただけとセシリアのほうを指差す。するとそこにはク

ラス対抗戦に向けてセシリアが、実戦的な訓練の相手を務めましょ
うと意気込んでいるのが見えた。そしてそれに対して箒の機嫌がさ
らに下降気味になっていた。

一夏「アハハハ…。どうしてここまでセシリアと箒の言い分がす
れ違うんだろ」

凱「ホントーに君は罪づくりな奴だなあ。後ろから刺されても知
らんぞ？」

意味が分からないと言わんばかりに凱はため息をついた。俺は首
をかしげることしかできなかった。

ちなみにクラス対抗戦とは、クラス代表同士によるリーグマツチ
のことだ。本格的なIS学習が始まる前の、スタート時点での実力
指標を作るために行なうようだ。

そして、クラス単位での交流およびクラスの団結のためのイベン
トだそうだ。やる気を出させるために一位のクラスには優勝賞品と
して“学食デザート半年フリーパス”が配られる。

一夏「まあやれるだけやってみますか」

セシリア「やれるだけでは困りますわ。勝っていただきませんと
！」

箒「そうだぞ！男たるもの弱気でどうする？」

女生徒A「織斑君が勝つとクラスみんながハッピーだよ！」

と、みんな好き勝手言ってくれる。でも最初白式に乗った時に感じた一体感、世界が生まれ変わったかのような感覚は今のところ見当たらなかった。

それでも動かしたただけ操縦に慣れていくのは、白式が俺の個性にパーソナリティ対して最適化をしてくれているから……らしい。

時間が経つにつれて俺の周りには女子が群がってくる。あつという間に女子で埋め尽くされた。まあ……慣れた。

女生徒A「織斑くん、頑張ってね」

女生徒B「フリーパスのためにもね！」

女生徒C「今のところ専用機を持っているクラス代表って一組と四組だけだから、余裕だよ」

楽しそうに話す女子一同の気概をそがないためにもここは……。

一夏「おうつ！」

これだけの返事をみんなに返す。

??「その情報古いよ」

教室の入口からふと聞いたことがあるような声がしてきた。

??「二組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていた子は……。

一夏「鈴？……お前、鈴か？」

鈴音「そうよ。中国代表候補生、ファン・リンイン鳳鈴音。今日は宣戦布告に来た
ってわけ」

フツと、小さく笑みを漏らす。するとトレード・マークのツイン
テールが軽く左右に揺れる。

一夏「何カッコつけてんだよ？ すごい似合わないぞ」

鈴音「んなっ！ なんてこというのよ。アンタはっ！」

さっきの気取った話し方はいつペンして、普通に喋り出した。

??「おい」

鈴音「なによ!？」

バアシイイイイン……。

聞き返した鈴に痛烈な出席簿アタックが到来した。織斑千冬鬼教官である。

織斑先生「もうSHRの時間だ。ショートホームルーム教室に戻れ」

鈴音「ち、千冬さん」

スパアアアアン……。

もう一度出席簿が鈴音の頭を直撃した。

織斑先生「先生を付ける。さっさと戻れ。入口を塞ぐな、邪魔だ」

鈴音「す、すみません……」

二発の出席簿が響いたのか、すぐさまドアからどく鈴音。その態度は100%ビビっている様子だった。

鈴音「また後で来るからね。逃げないでよ、一夏！」

織斑先生「さっさと戻れ、何度言わせるんだ？」

鈴音「は、はいっ……」

二組に向かって猛ダッシュ。

一夏「って言うかアイツ、IS操縦者だったのか？初めて知った」
素直に思ったことを口に出したのがまずかった。

セシリア「い、一夏さん。あの人はどういう関係で？」

第「……一夏、今のは誰だ？知り合いか？えらく親しそうだったが……？」

俺は今、多数のクラスメイトからの質問の集中砲火を浴びている。
凱はいつの間にか自分の席に戻っていた。あとで昨晚のことを聞いておかないと。

バシンバシンバシン……。

織斑先生「席に着け。馬鹿者共がっ！」

出席簿が、唸りを上げてちゃっちゃつと席に戻らなかったクラス
メイトの頭を直撃する。

それにしても俺の^{「夏」}知り合いばかりと再会するなあ。人生ってのは
不思議なものだ。

第33話〜一夏のハーレム形成中〜（後書き）

オリ主をどこでフェードアウトさせて“なのは”に戻すか難儀しているところです。

・無人機戦終了後。

・ラウラ戦後。

・臨海学校終了後。

上記のいずれかで展開を変える予定です。ヒロインはいますが多分、異世界には連れて行かないと思います。しかし、他世界と他世界は行き来できるので永遠の別れというのは作らない方向です。

一つの世界に一人のヒロインがいるって感じです。

見てくださる方にホントーに感謝しております。もう一つのほうも今週中には投稿したいと思います。

お知らせ

作者の文才不足ゆえにこの話の続きを書く事が困難な状態に至りました。

それでこの作品を一旦、永久凍結化しましてリメイク版を書きたいと思っています。

この結果に至った理由は矛盾に気づかせて下さった読者の方と、自分で読んでいて「あれっ、この場面変だなあ」と思い立ったからです。

なので、この「お知らせ」をもちまして完結とさせていただきます。

今度書くときはもっと良い作品を書きたいと思います。変わらず見てくださった読者の皆様には感謝の一言で一杯です。

2012/1/11 水曜日

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6285w/>

非日常の旅人

2012年1月11日18時48分発行